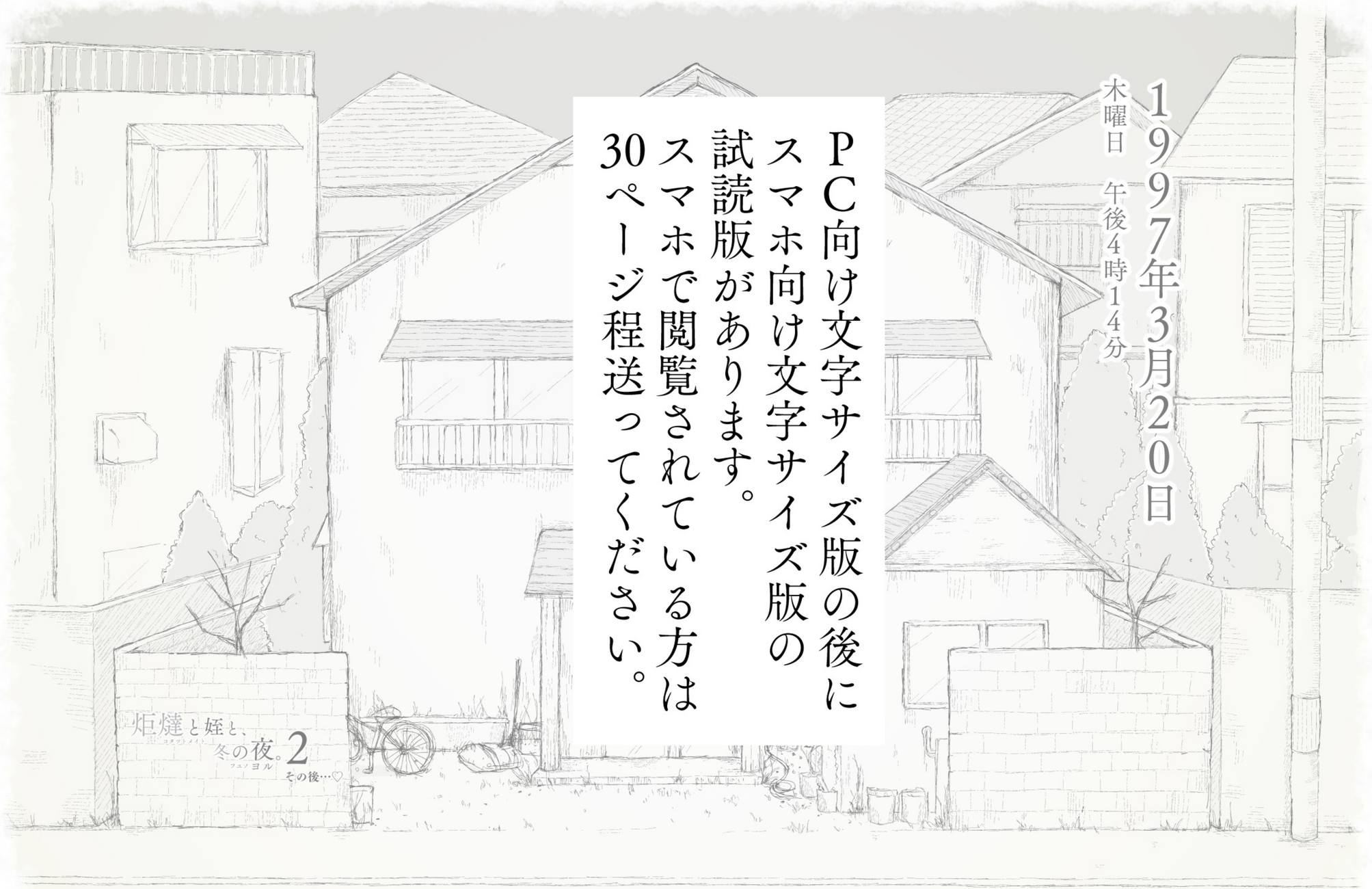


PC向け文字サイズ版の後に
スマホ向け文字サイズ版の
試読版があります。
スマホで閲覧されている方は
30ページ程送ってください。

1997年3月20日
木曜日　午後4時14分
炬燵と姪と、
冬の夜。2
その後…♡

「ただいま。」

「おかえり〜。寒かったでしょ〜。早く炬燵で暖ま、あ、あ、まって。その前にこれ、おじさんとこに持ってってくれない？ごめんねー。」

「シチュー？　…わかった。」

もう春なのに、ここ数日真冬がぶりかえしたかのようにひどく冷え込む。身体の温まるシチューは、いいね。

2ヵ月前。
家族に内緒で叔父さんと
セックスをした。

大晦日の夜…いや元日の深夜？ん？
まあいっか。

あの日もひときわ寒い一日で
近所の犬の遠吠えにも悲壮感があったな。
家の中でも白い息が出てた。

おばあちゃん
おにぎりも
作ってあげて

そうだね

叔父さん
大きいの
ほおばるのが
好きみたい…

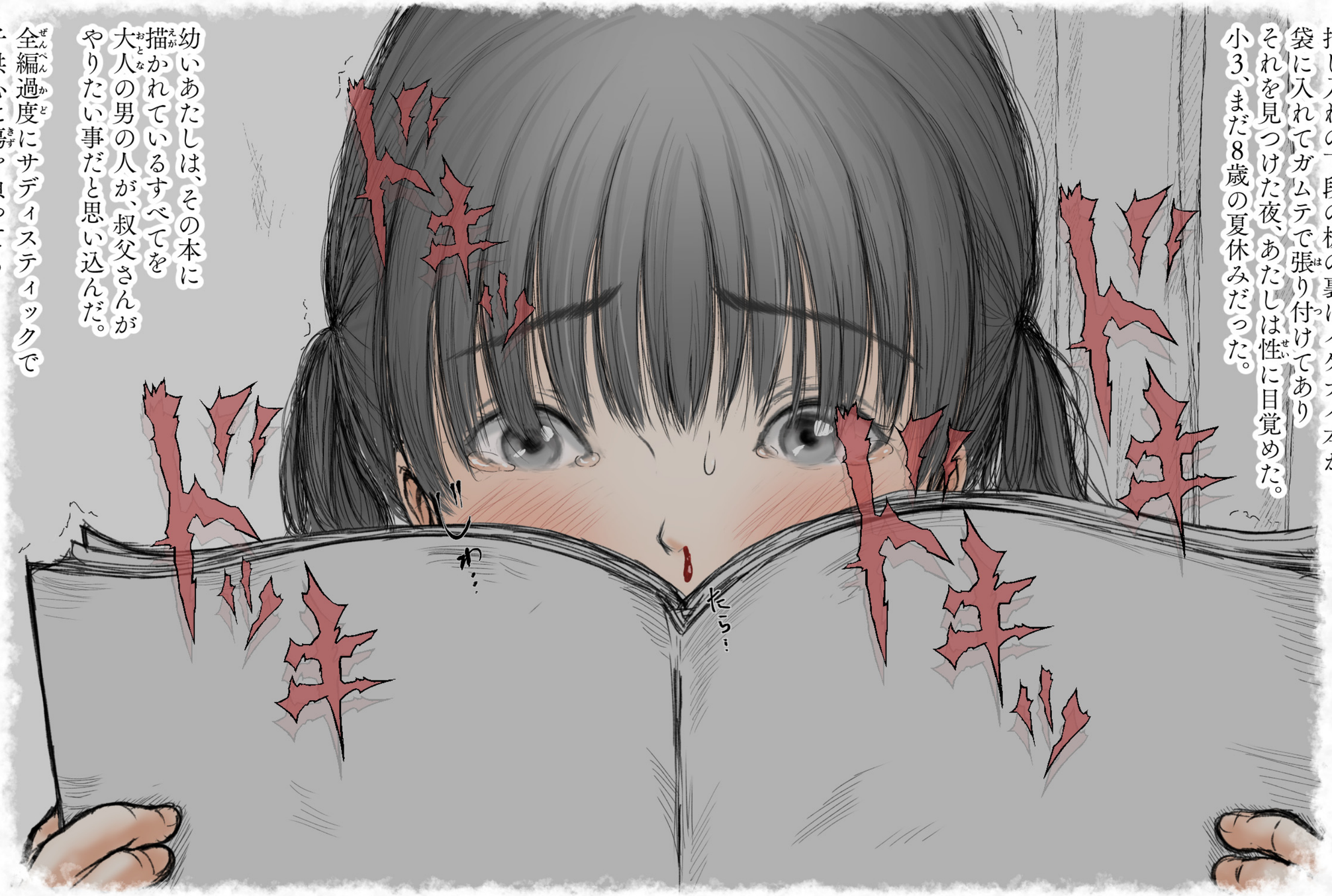
はいよー

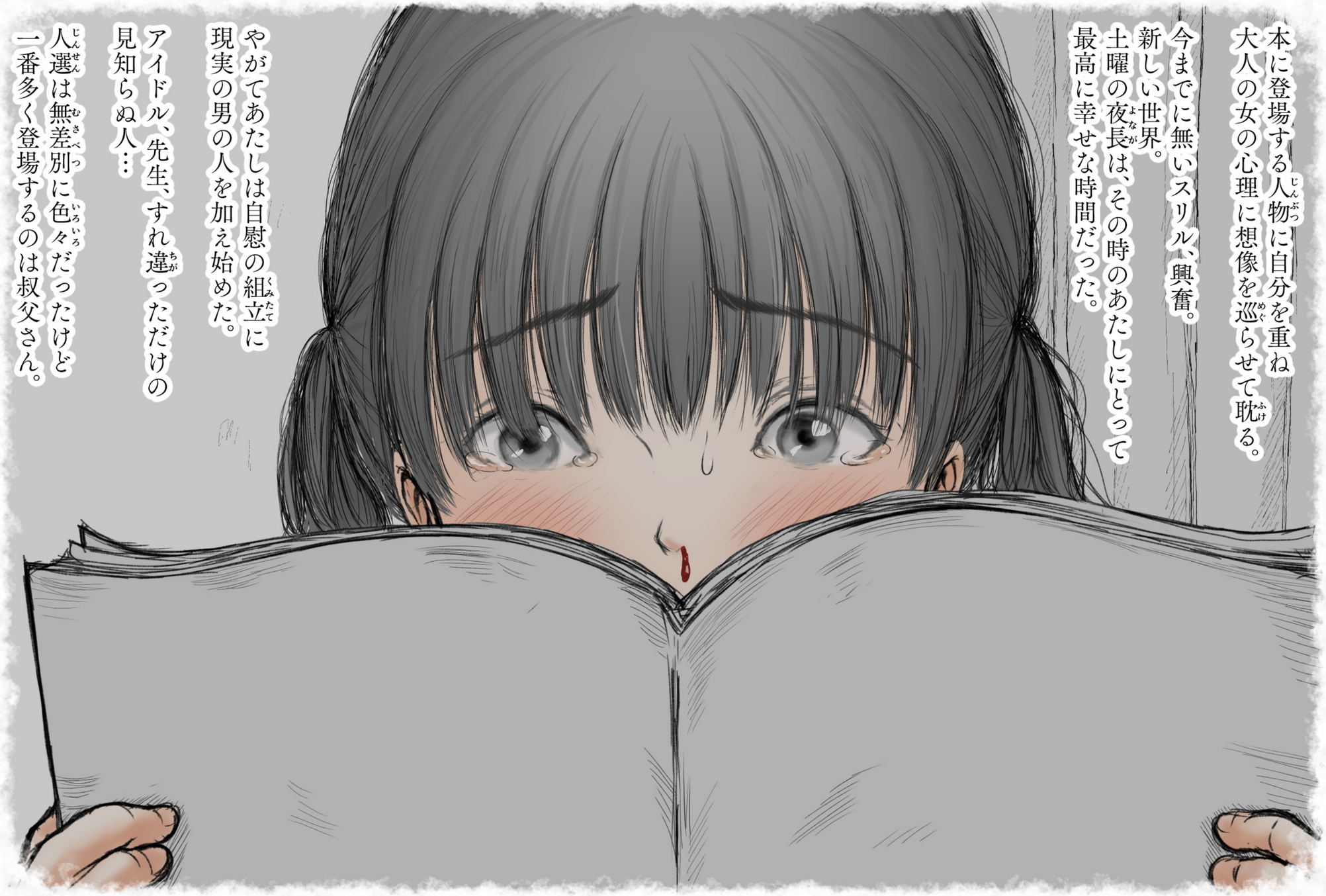
朝、おばあちゃんから
久しぶりに叔父さんが帰ってくると
聞いて、嬉しくて。

でもあたしはきっと怖がられてるから
安直に喜んでいいものか
不安でもあった。

長いけど経緯。

すっ♡


2Fのあたしの部屋は元々叔父さんが
使っていた部屋で
昔やったまま忘れてしまったのだろう、
押し入れの下段の板の裏にイケナイ本が
袋に入れてガムテで張り付けてあり
それを見つけた夜、あたしは性に目覚めた。
小3、まだ8歳の夏休みだった。
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
じわ…
たら…
幼いあたしは、その本に
描かれているすべてを
大人の男の人が、叔父さんが
やりたい事だと思い込んだ。
全編過度にサディスティックで
子供心に傷を負っても
おかしくないそれら内容は
しかし、なぜかあたしにとって
『OK』だった。



自慰の所作を覚え
1ヶ月後に初めてのオーガズムを知り
3ヶ月もすると自在にそこへイけるように
なってた。

本に登場する人物に自分を重ね
大人の女の心理に想像を巡らせて耽る。

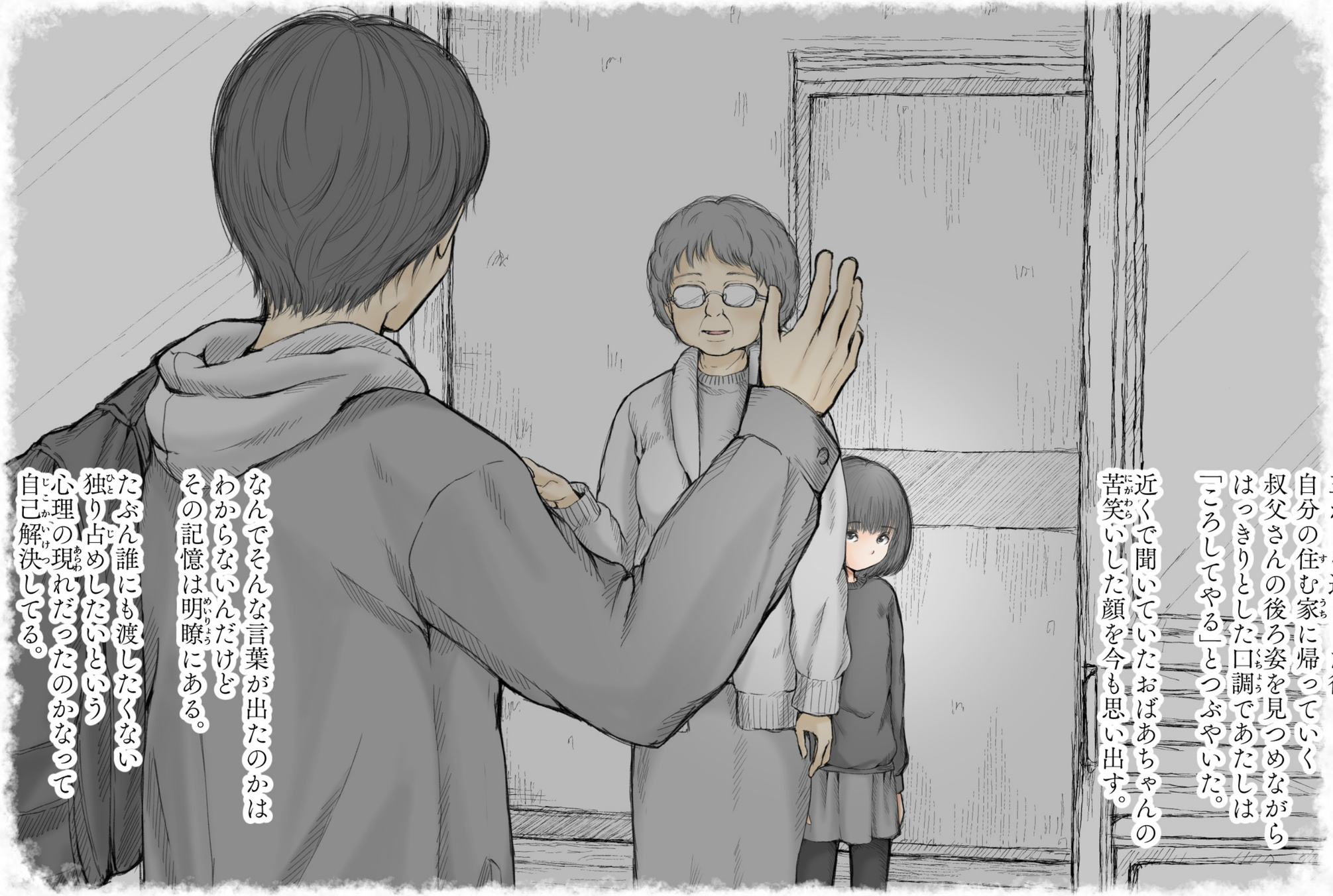
今までに無いスリル、興奮。
新しい世界。
土曜の夜長は、その時のあたしにとって
最高に幸せな時間だった。

やがてあたしは自慰の組立に
現実の男の人を加え始めた。

アイドル、先生、すれ違っただけの
見知らぬ人…

人選は無差別に色々だったけど
一番多く登場するのは叔父さん。

…初恋の人。



あれは6歳の時。
…たぶんそのぐらい。

いつものように正月に帰省して
三が日を過ごした後
自分の住む家に帰っていく
叔父さんの後ろ姿を見つめながら
はっきりとした口調であたしは
「ころしてやる」とつぶやいた。

近くで聞いていたおばあちゃんの
苦笑いした顔を今も思い出す。

なんでそんな言葉が出たのかは
わからないんだけど
その記憶は明瞭にある。

たぶん誰にも渡したくない
独り占めしたいという
心理の現れだったのかなって
自己解決してる。

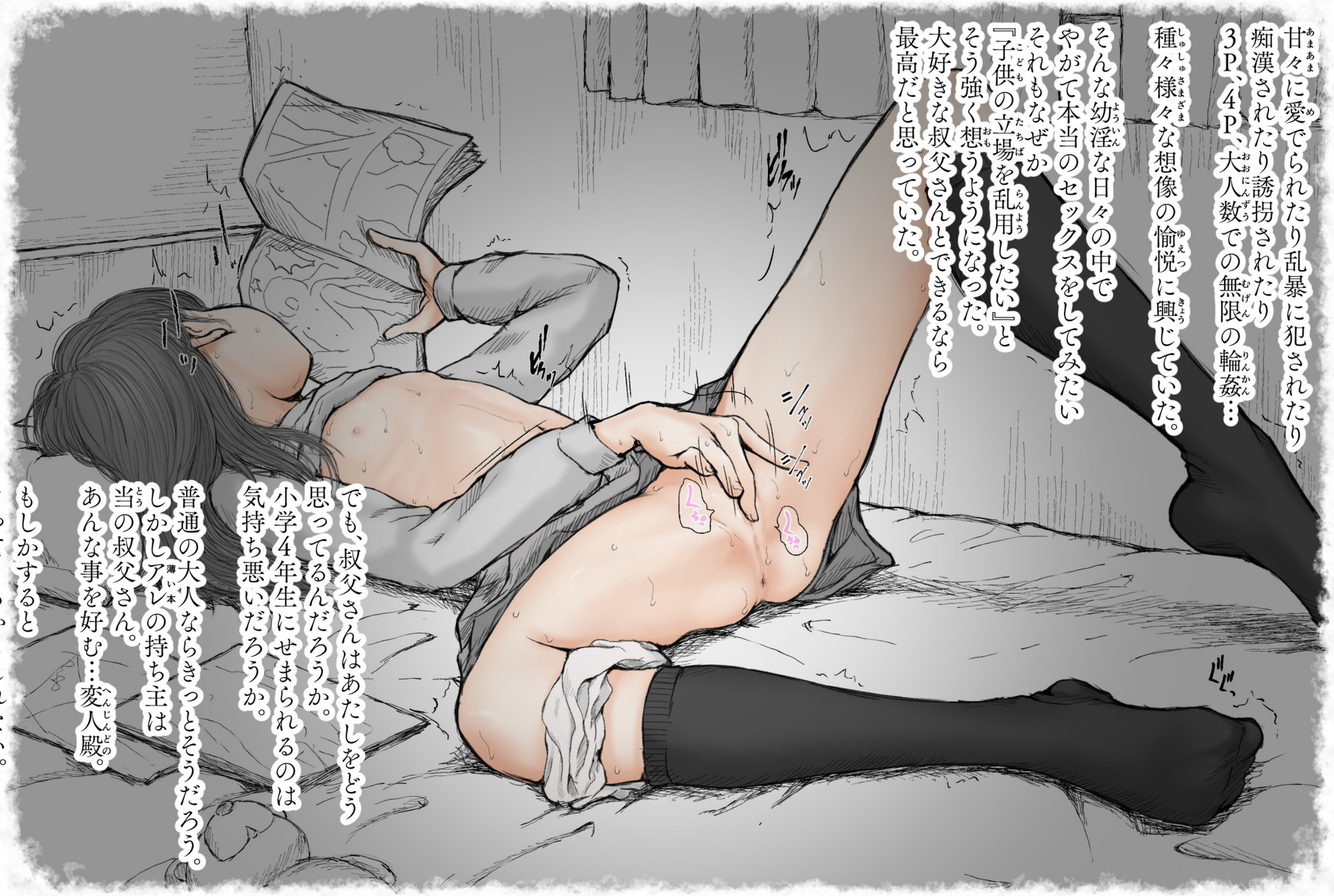
とにかくその頃から叔父さんを
好きになった。

小1で叔父さんに初恋をして
小3で秘蔵本による性の開花。

4年生の頃には妄想世界の開拓も進み

甘々に愛でられたり乱暴に犯されたり
痴漢されたり誘拐されたり
3P、4P、大人数での無限の輪姦…
種々様々な想像の愉悦に興じていた。

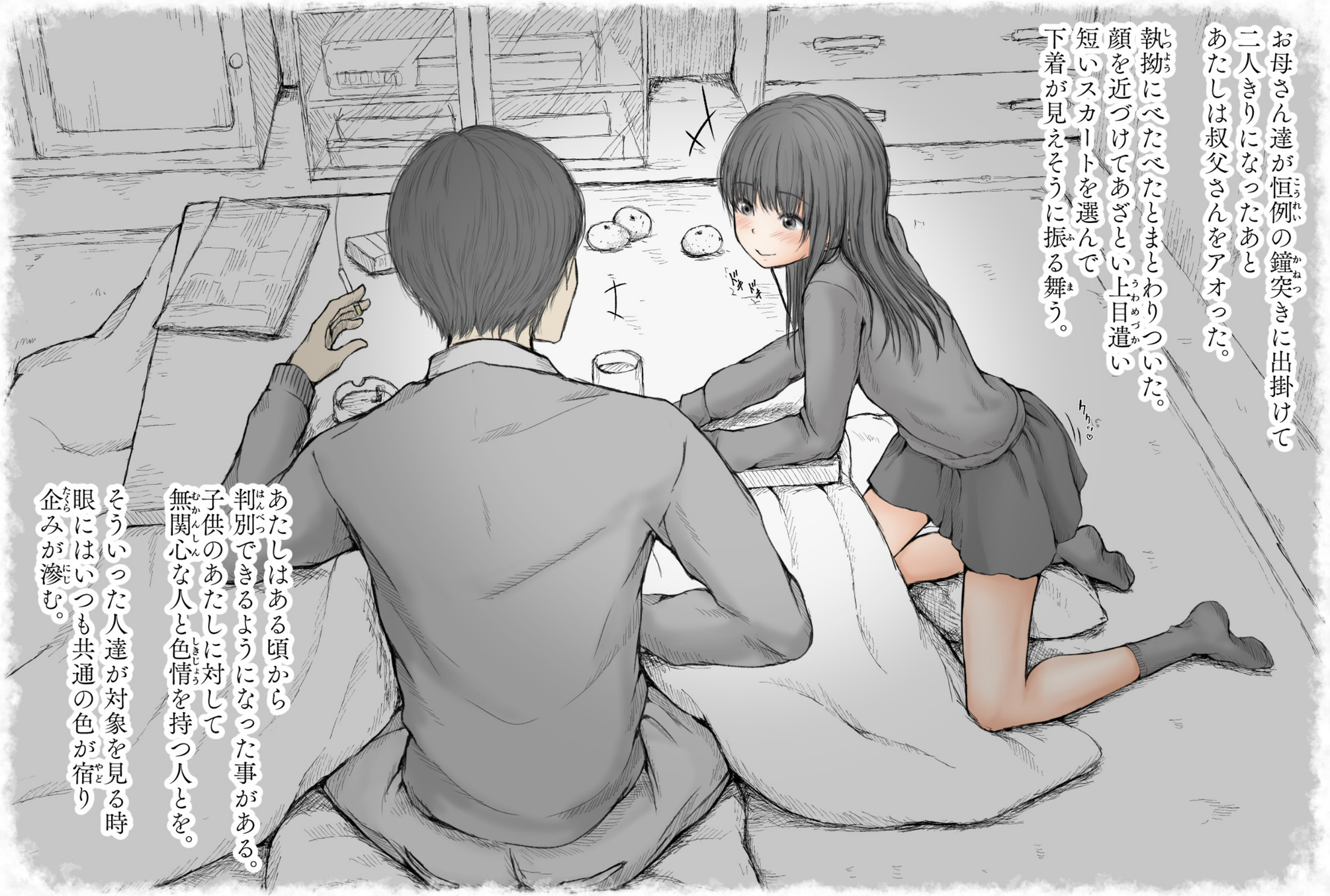
そんな幼淫な日々の中で
やがて本当のセックスをしてみたい
それもなぜか
『子供の立場を乱用したい』と
そう強く想うようになった。
大好きな叔父さんとできるなら
最高だと思っていた。



でも、叔父さんはあたしをどう
思ってるんだろうか。
小学4年生にせまられるのは
気持ち悪いだろうか。

普通の大人ならきっとそうだろう。
しかしアレの持ち主は
当の叔父さん。
あんな事を好む…変人殿。

もしかすると
ノってくるかもしれない。
行動を起こせば
何かが起きるかもしれない。
勝手な算段に期待で胸が膨らんだ。


そして待ちに待った大晦日の夜。
その年もいつも通りに
叔父さんは帰省して、炬燵でおしゃべり。
お母さん達が恒例の鐘突きに出掛けて
二人きりになったあと
あたしは叔父さんをアオった。
執拗にべたべたとまとわりついた。
顔を近づけてあざとい上目遣い
短いスカートを選んで
下着が見えそうに振る舞う。
ドキ ドキ
ククッ
あたしはある頃から
判別できるようになった事がある。
子供のあたしに対して
無関心な人と色情を持つ人とを。
そういった人達が対象を見る時
眼にはいつも共通の色が宿り
企みが滲む。
いつしかあたしも
その眼差しに密かで淫らな
性の高揚を覚えるようになった。
早熟だなと自分でも思う。

それは『おじさん』の眼にも表れた。
やっぱりそうだった。
サド気質の人に多いらしい傾向。

叔父さんはその類の人だ。
あたしの事、『有り』だ。

下着が濡れるのが分かった。
あんなに興奮したのは
初めてイケナイ本を読んだ、あの夜以来だった。

鐘突きに行ったお母さん達が
帰ってきたら、事は進まなくなる。
また来年まで持ち越し。

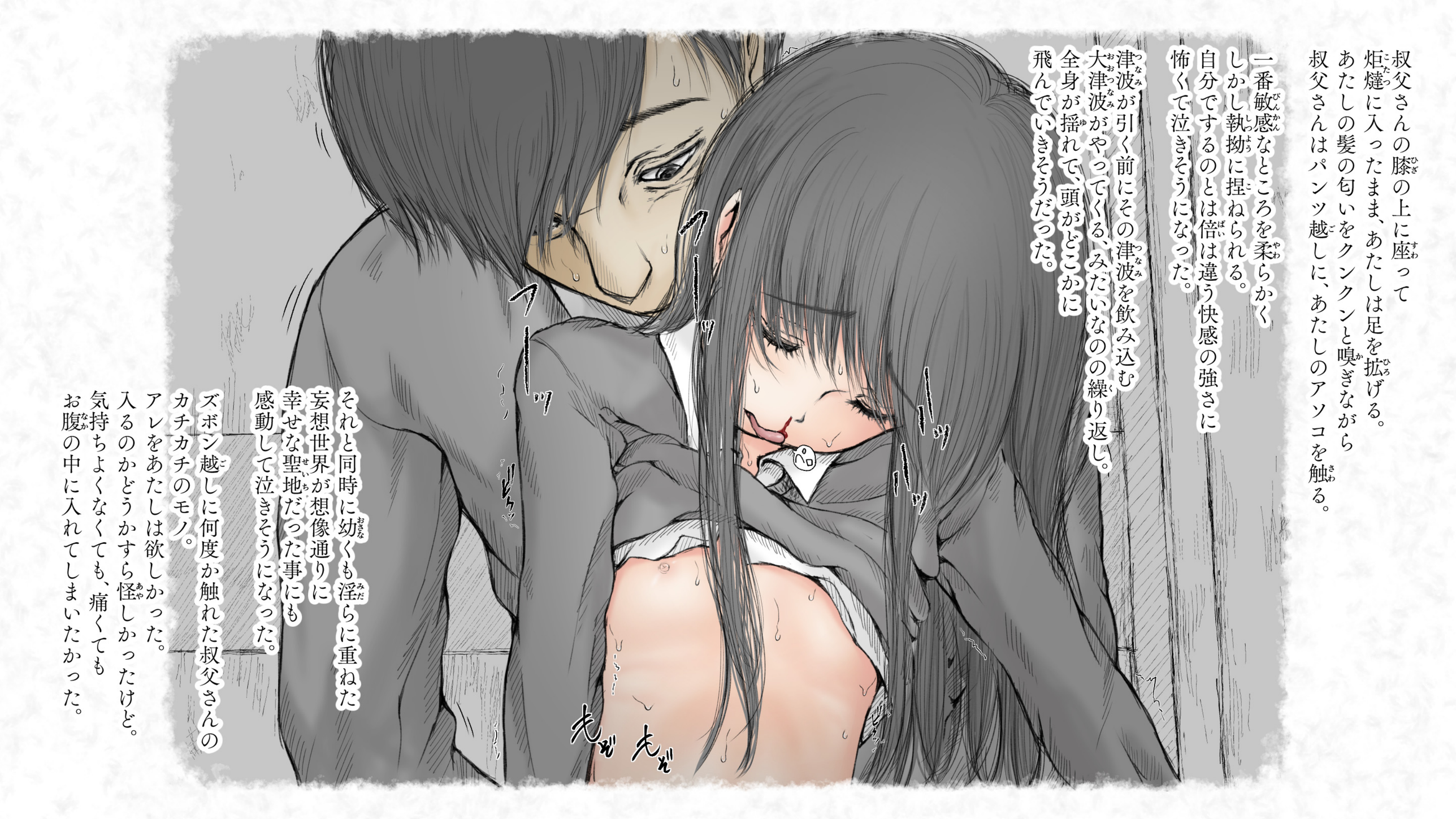
気持ちが焦る。
隠してるつもりだったけど
たぶんバレバレだったと思う。

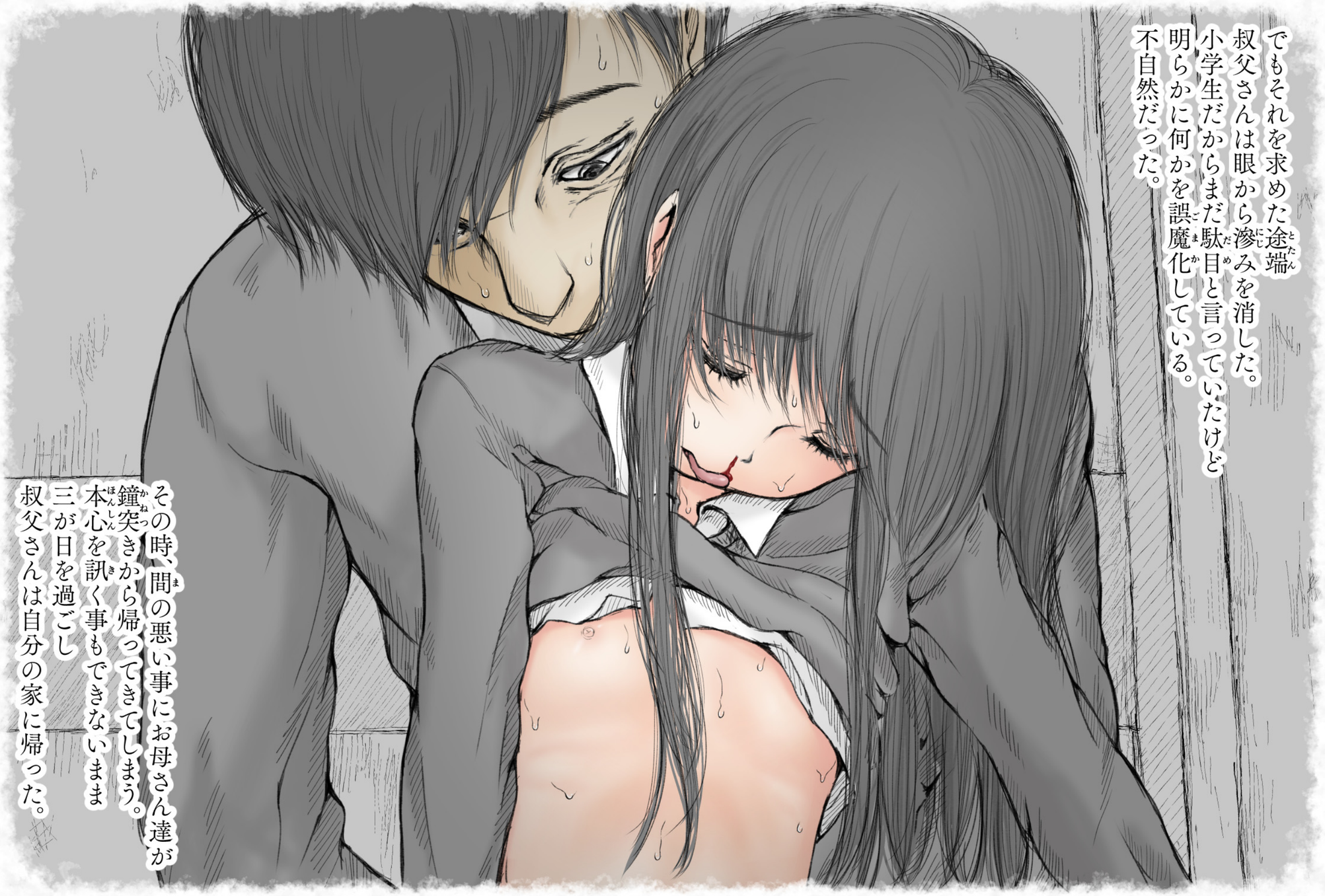
本や妄想と現実は違う
それはちゃんと区別していた。

仮にあたしが、叔父さんが食指を
伸ばすに足る素材だとして
一体どの程度まで
叔父さんはするだろう。
したいと思っているだろう。

じゃれ合って偶然を装い
触ってくる…
そんな戯れ事ヤダ。
ちゃんと大人の本当のやつをしたい。

不安は杞憂に、現実はあたしの
望んだままに進んでいった。


叔父さんの膝の上に座って
炬燵に入ったまま、あたしは足を拡げる。
あたしの髪の匂いをクンクンと嗅ぎながら
叔父さんはパンツ越しに、あたしのアソコを触る。
一番敏感なところを柔らかく
しかし執拗に捏ねられる。
自分でするのとは倍は違う快感の強さに
怖くて泣きそうになった。
津波が引く前にその津波を飲み込む
大津波がやってくる、みたいなのの繰り返し。
全身が揺れて、頭がどこかに
飛んでいきそうだった。
ペロ
それと同時に幼くも淫らに重ねた
妄想世界が想像通りに
幸せな聖地だった事にも
感動して泣きそうになった。
ズボン越しに何度か触れた叔父さんの
カチカチのモノ。
アレをあたしは欲しかった。
入るのかどうかすら怪しかったけど。
気持ちよくなくても、痛くても
お腹の中に入れてしまいたかった。



でもそれを求めた途端
叔父さんは眼から滲みを消した。
小学生だからまだ駄目と言っていたけど
明らかに何かを誤魔化している。
不自然だった。

その時、間の悪い事にお母さん達が
鐘突きから帰ってきてしまう。
本心を訊く事もできないまま
三が日を過ごし
叔父さんは自分の家に帰った。

そして…
叔父さんは帰省しなくなった。

当時のあたしには何がなんだか
全くわからなかった。

いつものアレだと考えるしかない。
人と仲が良くなりかけても
ある日、急に敵意を向けられる
あたしの…なんていうかパターン。

『あいつは頭がおかしい』
『意味わかんなくて怖い』

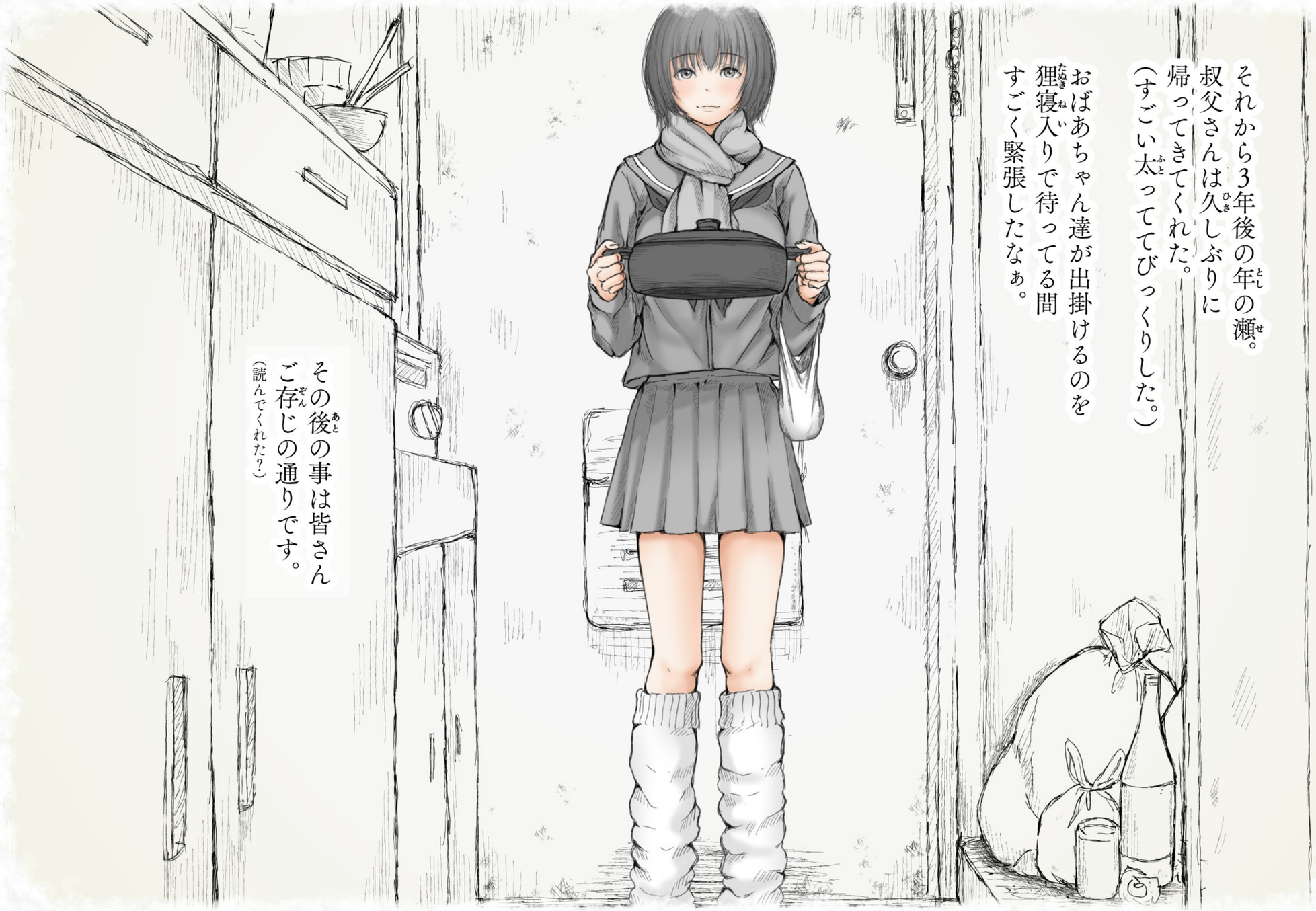
そんな陰口は何度も聞いた。
きっと自分では分からない
意識できていない不快な言動行動を
あたしはそこかしこでやりながら
生きてるんだろう。
だから友達がいない。できない。

でも、叔父さんだけはあたしの
その『何かしら』に反応がない。
昔から。

毎年お正月に帰ってきては
親以上に可愛がってくれる。
何を喋っても、どんな事をしても
笑うか、普通に怒る。

あたしへの嫌気を溜めて
堪り兼ね突然豹変されるより
その場で、理由つけて叱られる方が
ずっといいんだよね…。

しかし、あの日とうとう
あたしはやらかした。
叔父さんですら引いちゃう何かを
やらかしたんだと
そう思うしかなかったんだよ。


それから3年後の年の瀬。
叔父さんは久しぶりに
帰ってきてくれた。
（すごい太っててびっくりした。）
おばあちゃん達が出掛けるのを
狸寝入りで待ってる間
すごく緊張したなぁ。
その後の事は皆さん
ご存じの通りです。
（読んでくれた？）

『時間をくれ。
痩せて、生活基盤を近くに移して
改めて俺から告白しに参る。』

宣言通りだった。
あれからの叔父さんは早かった。
すぐに会社を辞めて本当に近くへ
引っ越してきてくれた。

別にお腹ブヨブヨのままでもいいのに
無理やり絶食ダイエットして
昔みたいにスリムになり
ケーキとメリーチョコと
バラの花束を携え、正装で告白された。
叔父さんには叔父さんなりの
『恋人への流儀』があるらしい。

それが今月頭、3週間ほど前の事。
あたしは嬉し過ぎて本当に
気を失ったんだよ。

すまん
もうちょっと〜

コクッ

ちなみに叔父さんの引っ越しには
追い風が吹いた。

(関係を結んだ後)三が日を終えて
帰ろうとする叔父さんとすれ違いで
泥酔した父親、元父親が
お母さんを訪ねてきた。

お母さんはもう何ヶ月も前から
それこそ去年から
身を隠すというていで
新しい彼氏と暮らしていて
家に居ない事を知ったお父さんは
逆上した。

お父さんの素行をよく知っている
叔父さんは、近くで待機していて
案の定暴れ始めた酔っ払いを
明らかに楽しそうにボコボコにしてた。

父ご乱心の際、おばあちゃんが腕に
軽傷(少しぶつけた程度)を負ったんだけど
その時の叔父さんの
『しめた』という表情が忘れられない。

「もうこれで何回目だろうなこの人。
警察がアテにならないんだったら
母さんを守る為にも
俺こっちに引っ越してくるよ。」

おばあちゃんは喜んでた。
そりゃそうだよね。
孫(あたし)が産まれるきっかけで
家を出て何年も経つ息子が
近くで生活してくれる。
自分の身を案じて。

いつもは岩みたいな顔をしてるのに
くしゃっと綻ばせて、おじいちゃんも
嬉しそうだった。

叔父さんはまんまと
誰にも警戒される事無く
順風満帆な社会生活の近況的には
就職氷河期と言われてるらしい昨今に
不釣り合いな動機の転職と

部屋が余っているのに
わざわざ余計な出費が生じるアパートを
実家の近所に借りるという
やや不自然な引っ越しを完了させた。

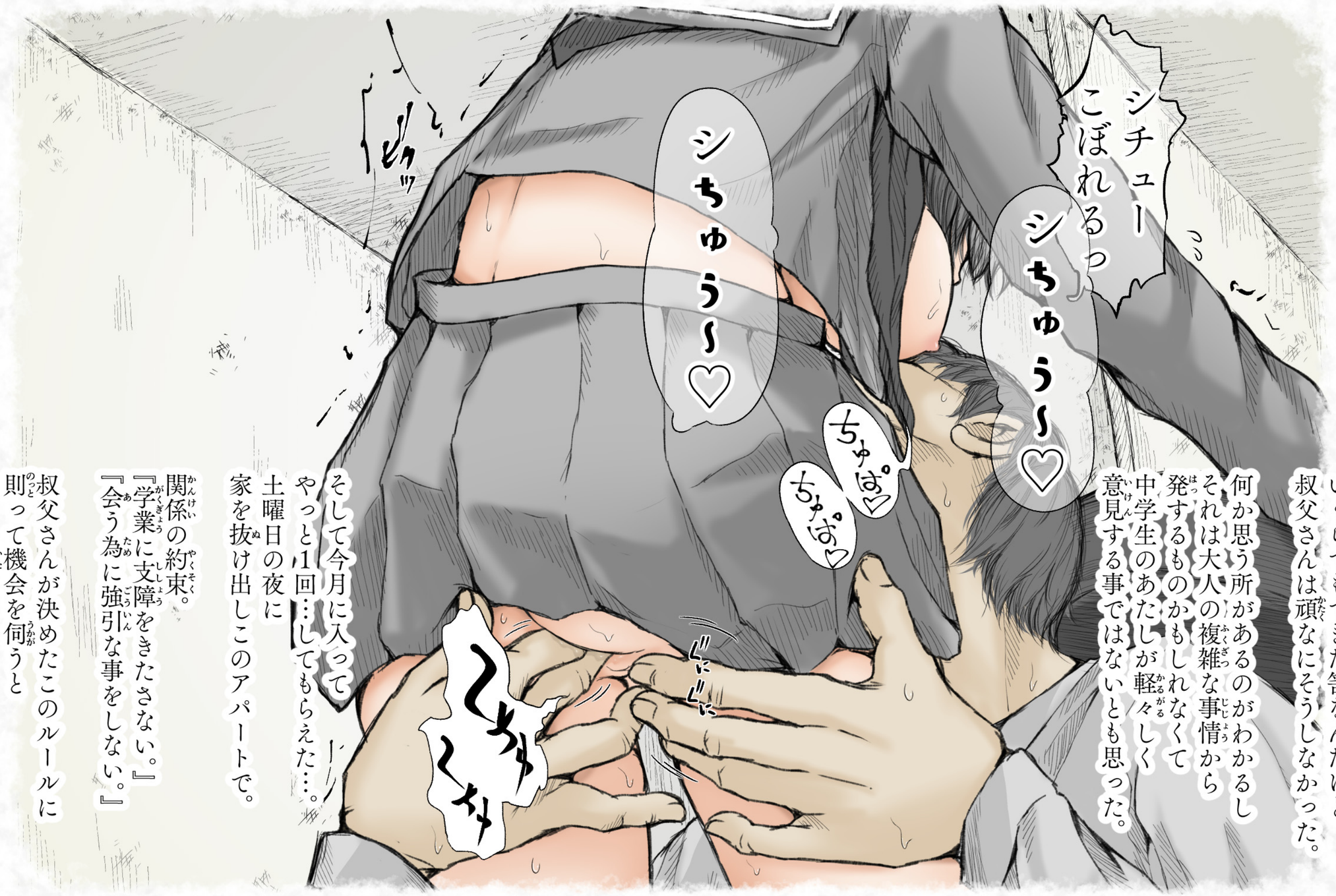
あたしだけが真意を知ってる。
叔父さんは、いろいろなものを捨てて…

姪との秘めた関係を選んだ。
選んでくれた…
はあ
れろれろ
はあ
はあ
ドキ
ドキ
「お待たせ。」
「あ…鍋あぶない…」
「よーしよし
ちゃんとノーブラで来たな～♪
この部屋を訪ねる時は
下着非着用な～♪
なんか最近さ
急に冬に戻ったみたいだよな。
外寒かったろ？
おっぱい鳥肌立ってんじゃん。
すぐ暖めてやるからな。」
「なべ…」
「ほらナベ、いやベロ出せ。」
「……ん…」
ふいに始まった幸せな日々♪
でもね、少しだけ困ってる事が
あるんだよ。

お正月に初めてセックスしてから
この3月まで二度目は無かった。

機会を作ろうと思えば
いくらでもできた筈なんだけど
叔父さんは頑なにそうしなかった。

何か思う所があるのがわかるし
それは大人の複雑な事情から
発するものかもしれなくて
中学生のあたしが軽々しく
意見する事ではないとも思った。

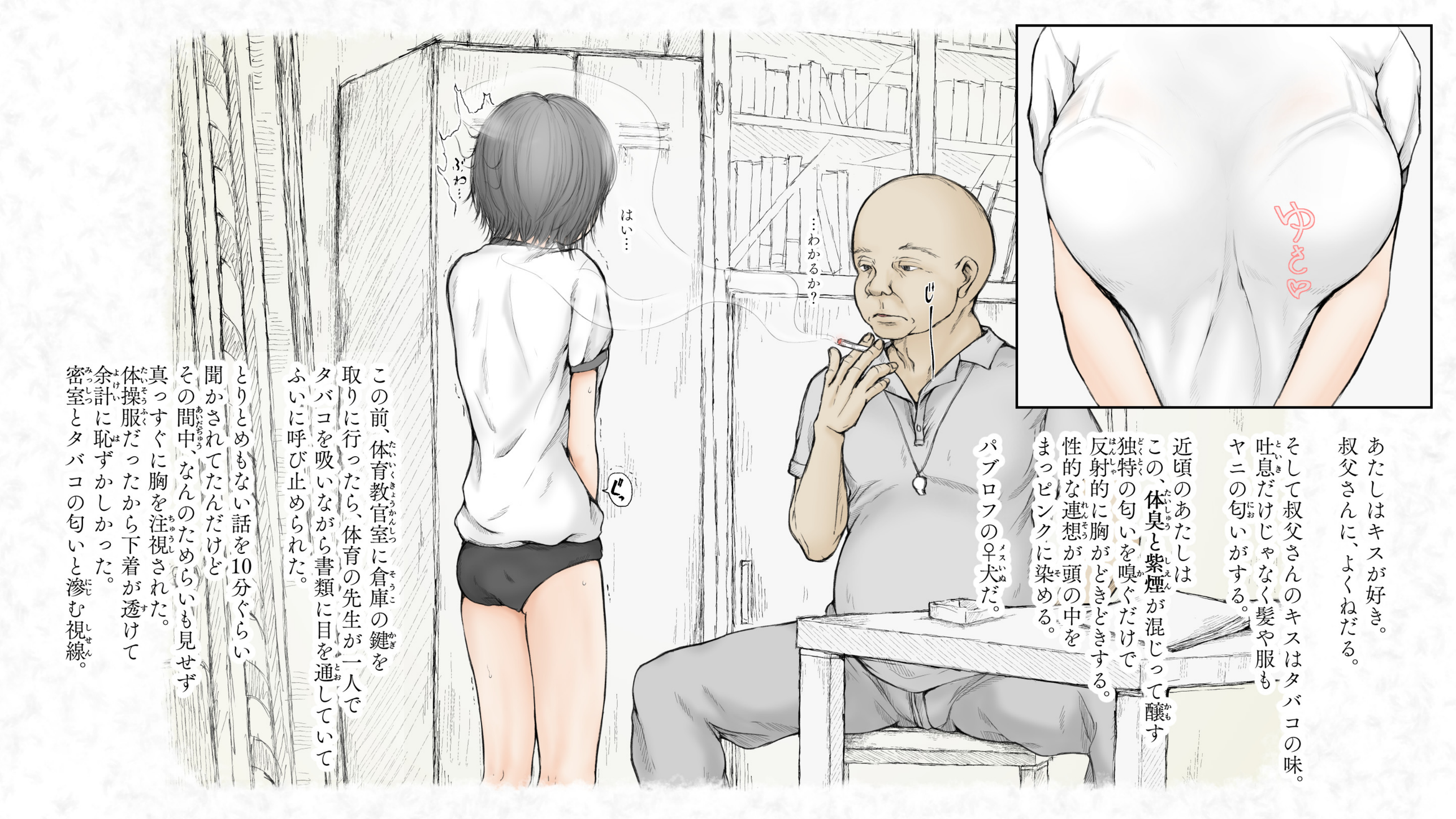


そして今月に入って
やっと1回…してもらえた…。
土曜日の夜に
家を抜け出しこのアパートで。

関係の約束。
『学業に支障をきたさない。』
『会う為に強引な事をしない。』

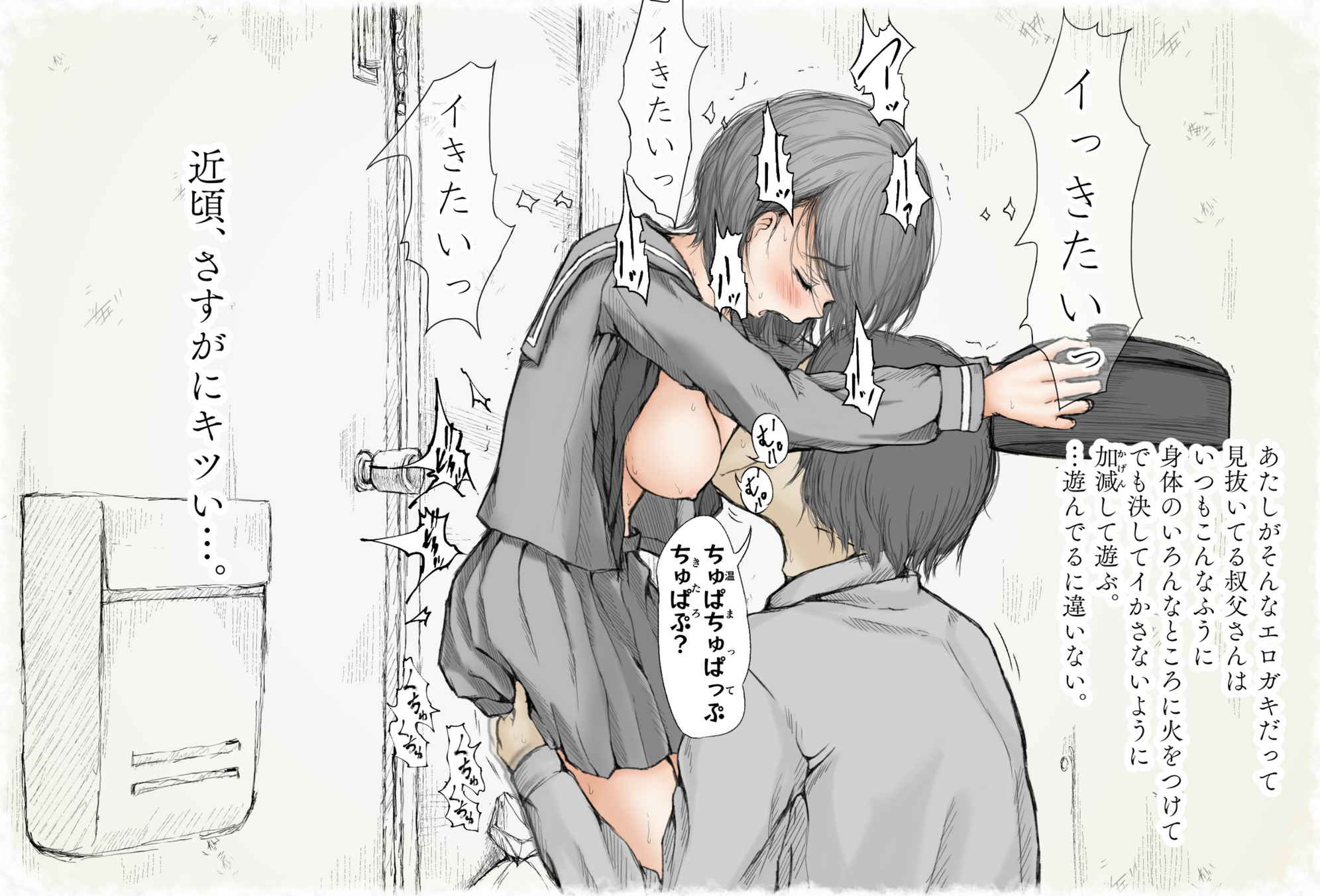
叔父さんが決めたこのルールに
則って機会を伺うと
行為に到れるのは
叔父さんの仕事のシフトとかみ合う
土曜日の夜だけになる。
それも時間にして2時間ぐらい。

叔父さんは、じらそうとして
やっているのか
今までの経験則に実直に
従っているだけなのか…
セックスの多幸さを覚えた直後に
こんなに間隔を空けられ
さらには自宅での自慰をも
禁じられ…(不服!!)
わかるよね
『堪らない』んだよ。
お正月からずっとそうなんだよ。
ぶる ぶる
アッ♡
アッ♡
アッ♡
むぱ
むぱ
くに くに
常時発情。授業中だって発情。
もぞもぞ落ち着かなくて
勉強どころじゃない。
むしろ学業に支障を
きたしてるんだよ。
見る夢はことごとくミダラ。
女でも夢精ってあるのかな?
そしたらちょっとは生活が
楽になるはず。
夢精なら自慰じゃないから
言いつけを破ってない。
夢精を切望して
眠りにつく女子中学生なんて
普通じゃないんだよ。



あたしはキスが好き。
叔父さんに、よくねだる。
そして叔父さんのキスはタバコの味。
吐息だけじゃなく髪や服も
ヤニの匂いがする。
近頃のあたしは
この、体臭と紫煙が混じって醸す
独特の匂いを嗅ぐだけで
反射的に胸がどきどきする。
性的な連想が頭の中を
まっピンクに染める。
パブロフの♀犬だ。

この前、体育教官室に倉庫の鍵を
取りに行ったら、体育の先生が一人で
タバコを吸いながら書類に目を通していて
ふいに呼び止められた。
とりとめもない話を10分ぐらい
聞かされてたんだけど
その間中、なんのためらいも見せず
真っすぐに胸を注視された。
体操服だったから下着が透けて
余計に恥ずかしかった。
密室とタバコの匂いと滲む視線。



叔父さんに自慰禁されてなかったら
はしたなくも、それを燃料にして
その夜何回もしてたと思う。

あたしは多淫だ。

あたしがそんなエロガキだって
見抜いてる叔父さんは
いつもこんなふうに
身体のいろんなところに火をつけて
でも決してイかさないように
加減して遊ぶ。
…遊んでるに違いない。

なぁなんでだ？なんで身体小さいのに胸だけこんなに先行してるんだ？
イきたい
またそれ言う…し、知らない…よ…
この体型…には…困ってるんだよ…
イきたい
シちゅう～♪シちゅう～～♪
きい…てる？
もむ♡
もむ♡
ふるふる

ねえ…ねえっ イきたいよっ
も、むりっ
イってもいいって言って…
だぁめぇ～～♪
ねえっ！お願い…だよ…
だぁ～♡～～めぇ～♡ 再来週の土曜日までお♡あ♡ず♡…
イッくっ！
イくっ イくっ♡
ビクッ
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ
もむ♡
もむ♡

も、むりっ
ねえ…ねえっ イきたいよっ
イってもいいって言って…
だぁめぇ～～♪
もむ♡
もむ♡
ビクッ
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ
イッくっ！
イくっ イくっ♡
ねえっ！お願い…だよ…
だぁ～♡～～め
再来週の土曜日
お♡あ♡ず♡
たー
グッ

あ…
あぐっ

首だいじょうぶ？
うん
大丈夫
…おいしい？
おいしい
…あたしの胸から
おいしいシチュー
出たら嬉しい？
嬉しいってか
便利だなと思う
…具はどうなんの？
ぐ？
ぐ
ぐって？
シチューの具だよ
乳腺通るの？
通らないに
決まってる

叔父と姪という近親
大人と子供という背徳
…の恋愛。

そんなあたし達を勘ぐる可能性があって
勘ぐられてマズイ相手は
お母さん、おばあちゃん、おじいちゃん。

お母さんは件の理由で居ないし
おじいちゃんはあたしに関心が無いから
一番気をつけなきゃいけないのは
おばあちゃん。

おばあちゃんの中で何らかの疑念が
芽生えた時
思い返す記憶の中に確信に到る
『出来事』を残さない為に

こういった、ふいに会えた時こそ
そっけない程とっとと帰宅してきた
そんな痕跡にしなければならない。

叔父さん曰く。

だから、もくもくとシチューを啜る
叔父さんの租借ほっぺの動きを
ゆっくりと眺めていたいのだけど
もう、すぐにでも帰らないといけない。

でも…。

(…どうかな…
迷惑に思うかな…

……言ってみるだけなら…
あとはおじさんに決めて…
もらって…)

「おじさんね…」
「なんだ？」

「明日仕事？」
「ああ、夜勤だけど。」
「だよね。夜勤って何時から？」
「22時から。」

「22時って…えと10時か。」
「ああ。どうした？」

「うん…。じゃあ今夜は夜更かし？」
「そうだよ。無理してでも
起きておかないと明日きつい。」

「なにするの？友達呼ぶ？」
「いや。ひとりで。
映画観るか……んーなんか。」

「映画か。あたしも観たいな。
おじさんと観たいな。」
「お前とは観ない。」

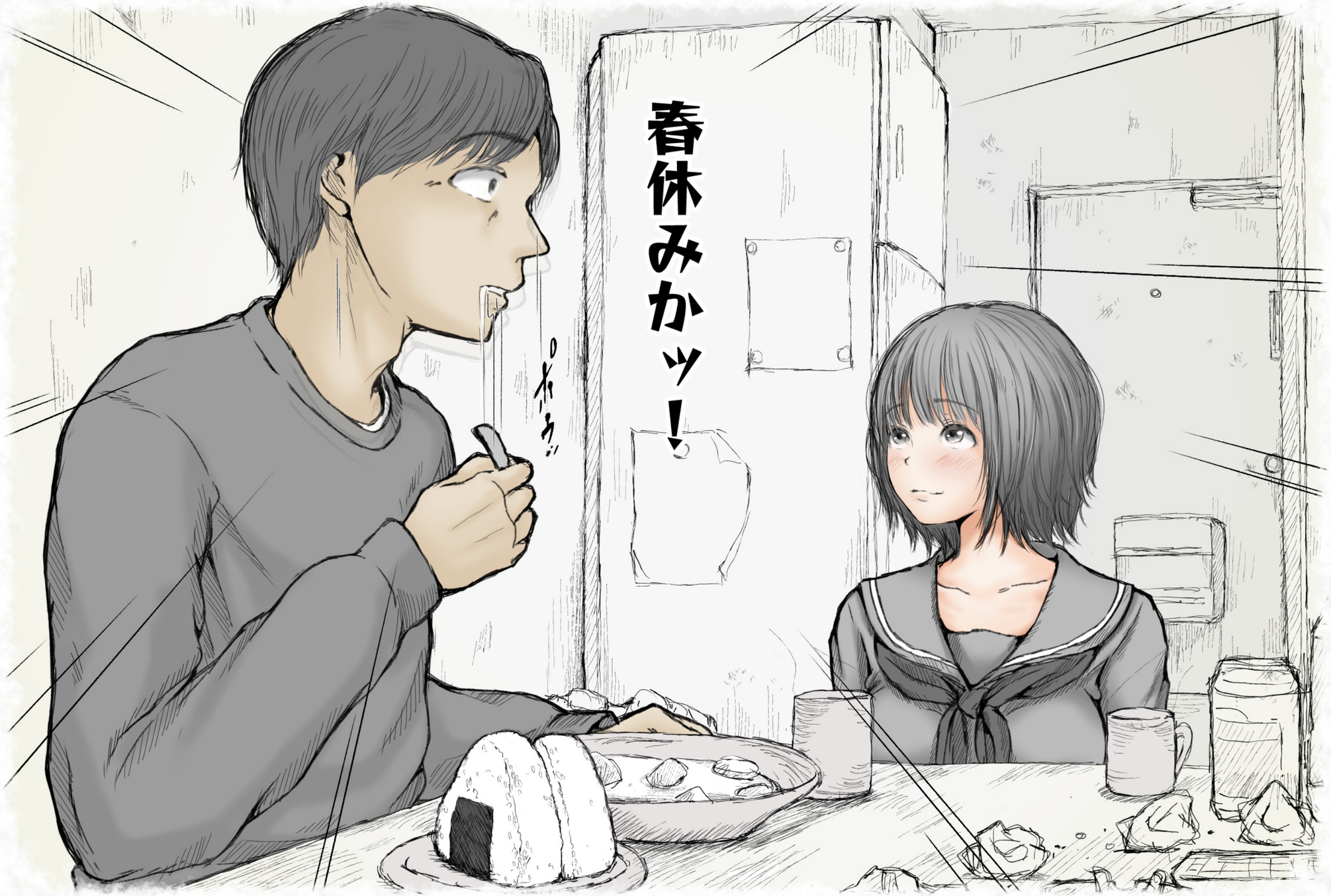
「え。なんで？」
「横でエロいから落ち着かない。」
「♡じゃ、じゃあ…ソレでも
……いい。そっちでもいい。」

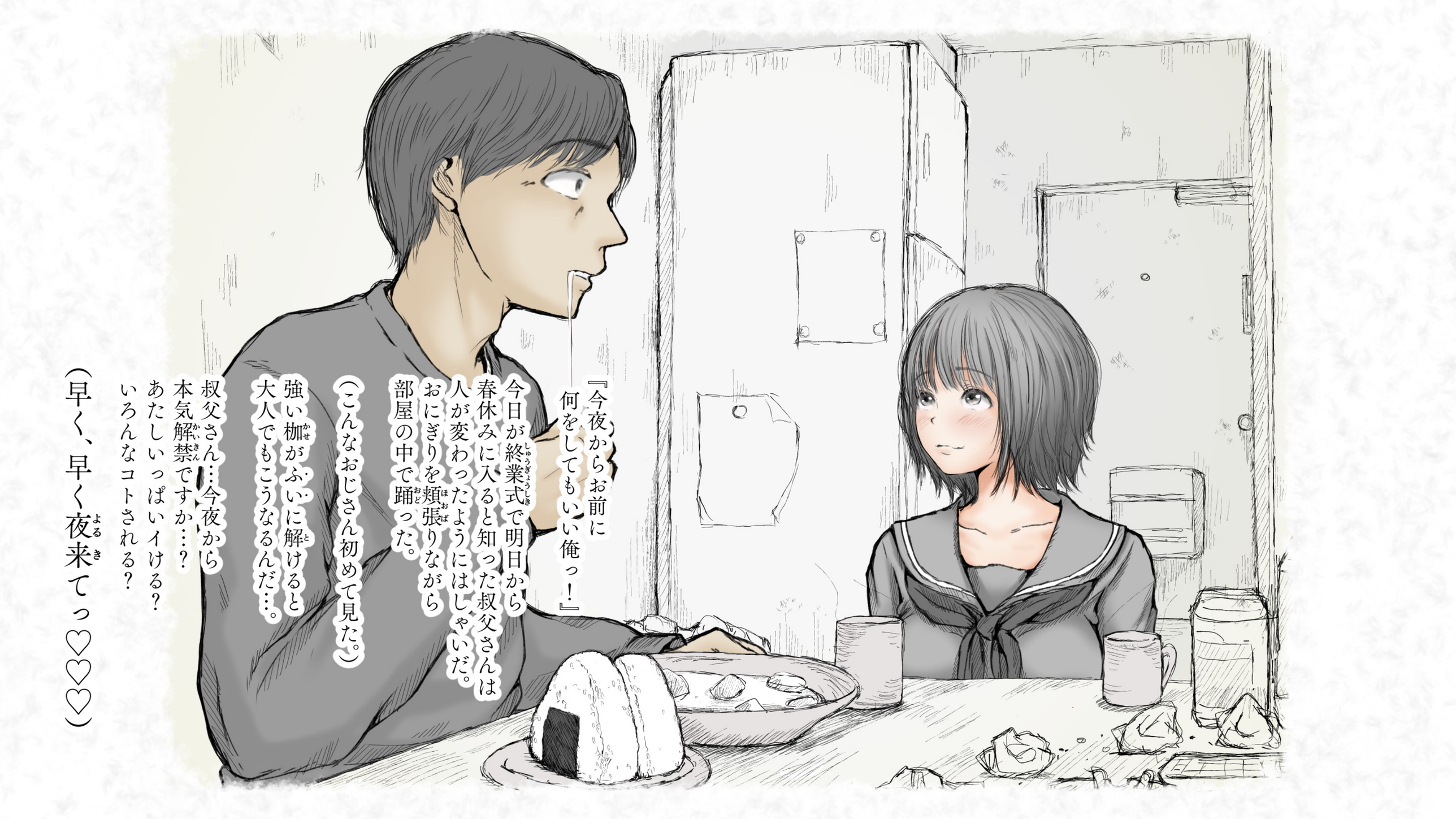
「お前ほんとセックス大好きだな。」
「そ、そんな事ない。
思春期平均。」

「平均ではないだろ絶対。
まあいいとして、明日金曜だぞ。
学校だろ？
だから何度も言ってるじゃん。
俺はお前の彼氏である一方
保護者的な立場もある叔父として
学校に障るような事はしないって。」
「うん。金曜なんだけど…。」

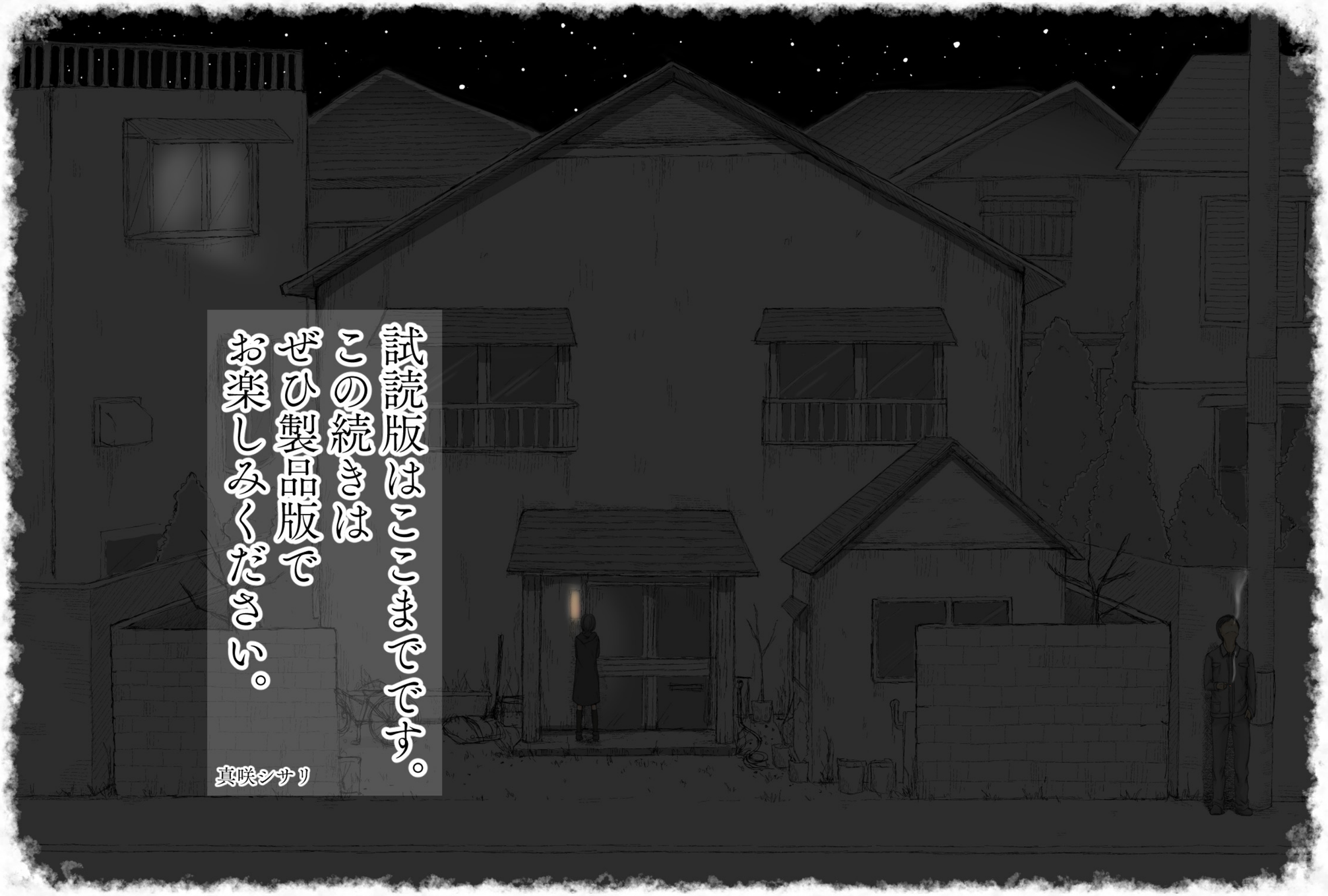
「……なんだよ。」
「うん…。」

「え、なに？……あっ。」


春休みかッ！
ポロッ

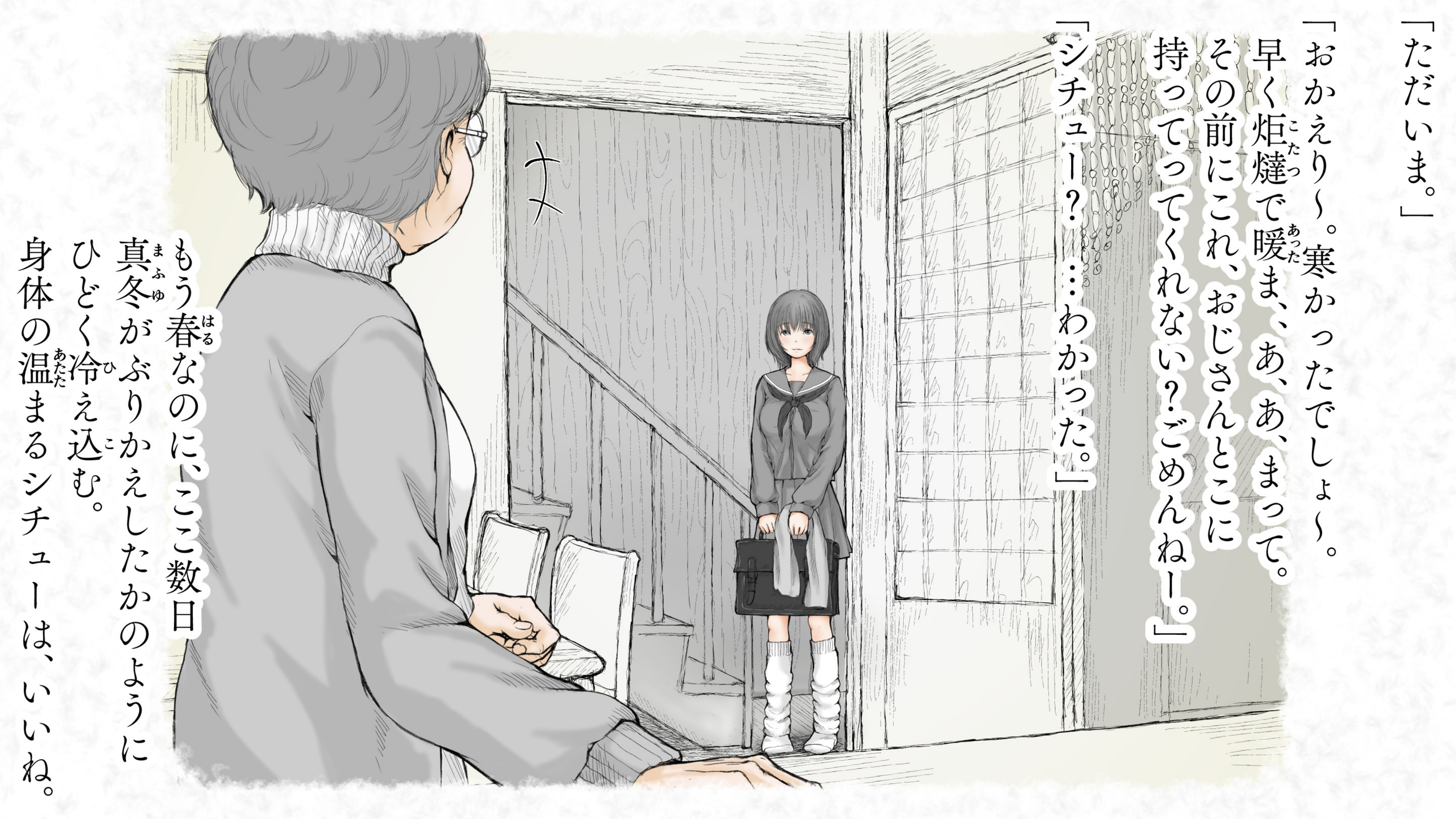

『今夜からお前に何をしてもいい俺っ！』
今日が終業式で明日から春休みに入ると知った叔父さんは人が変わったようにはしゃいだ。おにぎりを頬張りながら部屋の中で踊った。
（こんなおじさん初めて見た。）
強い枷がぶいに解けると大人でもこうなるんだ…。
叔父さん…今夜から本気解禁ですか…？あたしいっぱいイける？いろんなコトされる？
（早く、早く夜来てっ♡♡♡）

それから数時間後…

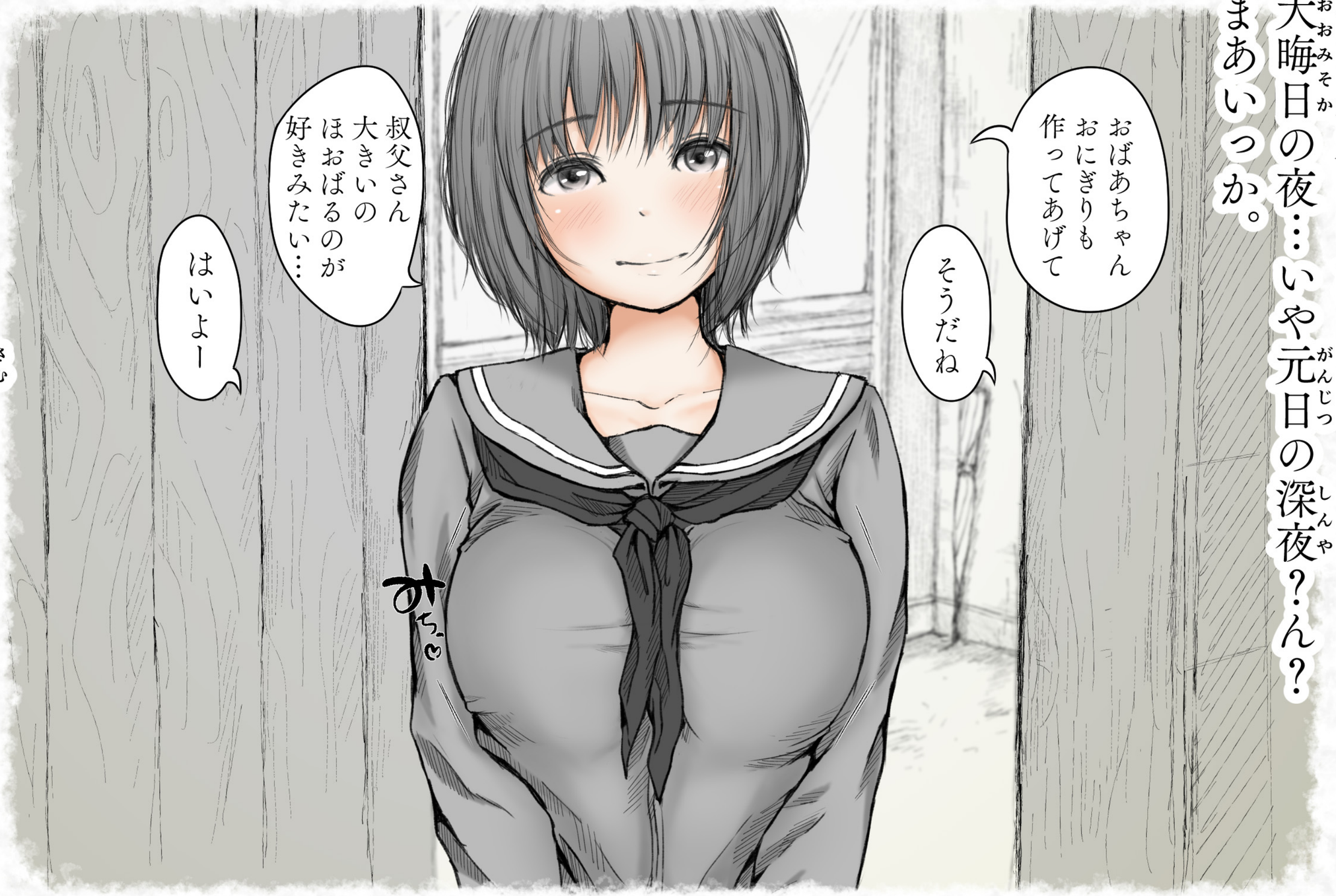


続いてスマホ向けの試読版です。

1997年3月20日
木曜日 午後4時14分
炬燵と姪と、冬の夜。2
その後…♡

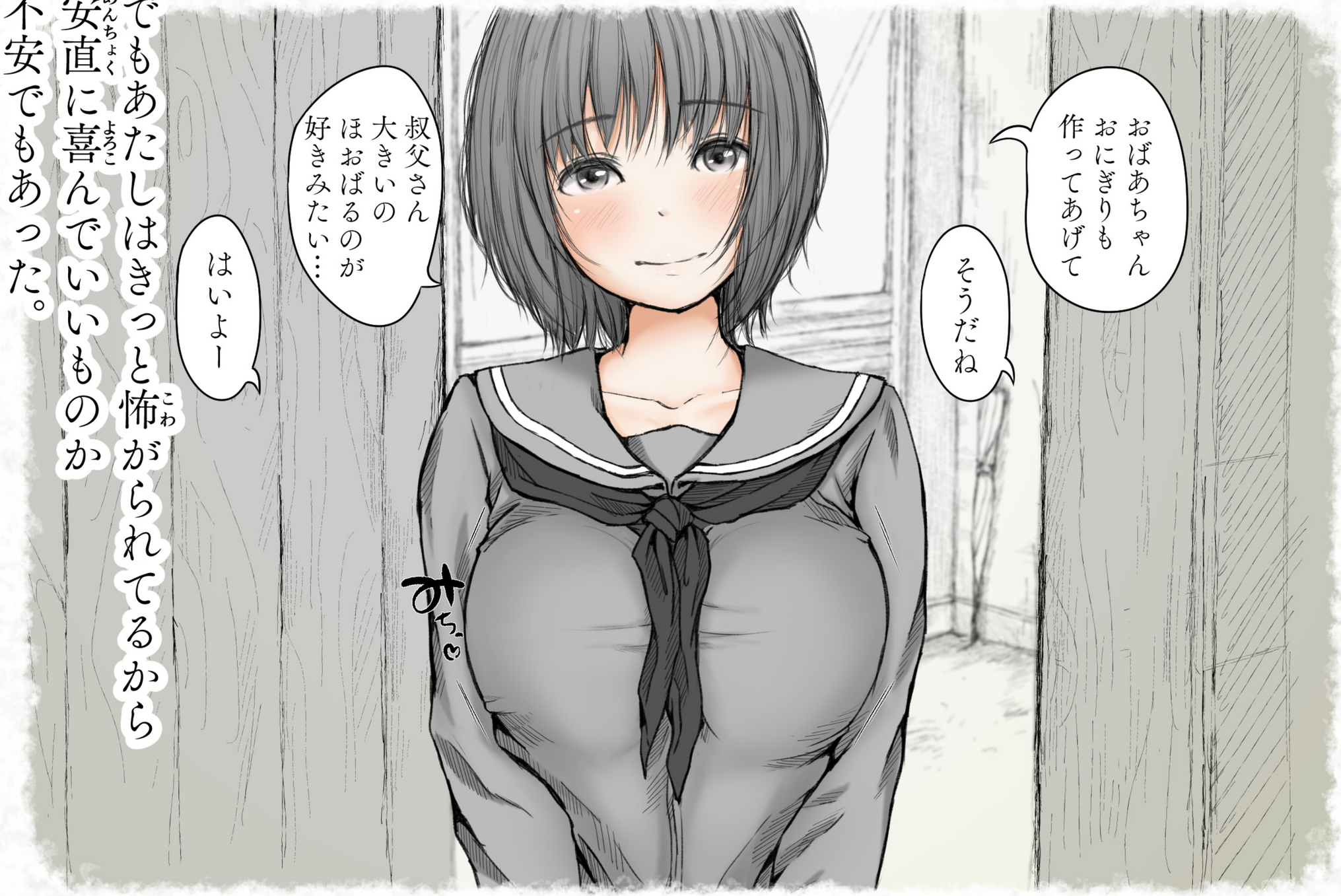

「ただいま。」
「おかえり～。寒かったでしょ～。早く炬燵で暖ま、あ、あ、まって。その前にこれ、おじさんとこに持ってってくれない？ごめんねー。」
「シチュー？…わかった。」
もう春なのに、ここ数日真冬がぶりかえしたかのようにひどく冷え込む。身体の温まるシチューは、いいね。

2ヵ月前。
家族に内緒で叔父さんと
セックスをした。
大晦日の夜…いや元日の深夜？ん？
まあいっか。



あの日もひときわ寒い一日で
近所の犬の遠吠えにも悲壮感があったな。
家の中でも白い息が出てた。

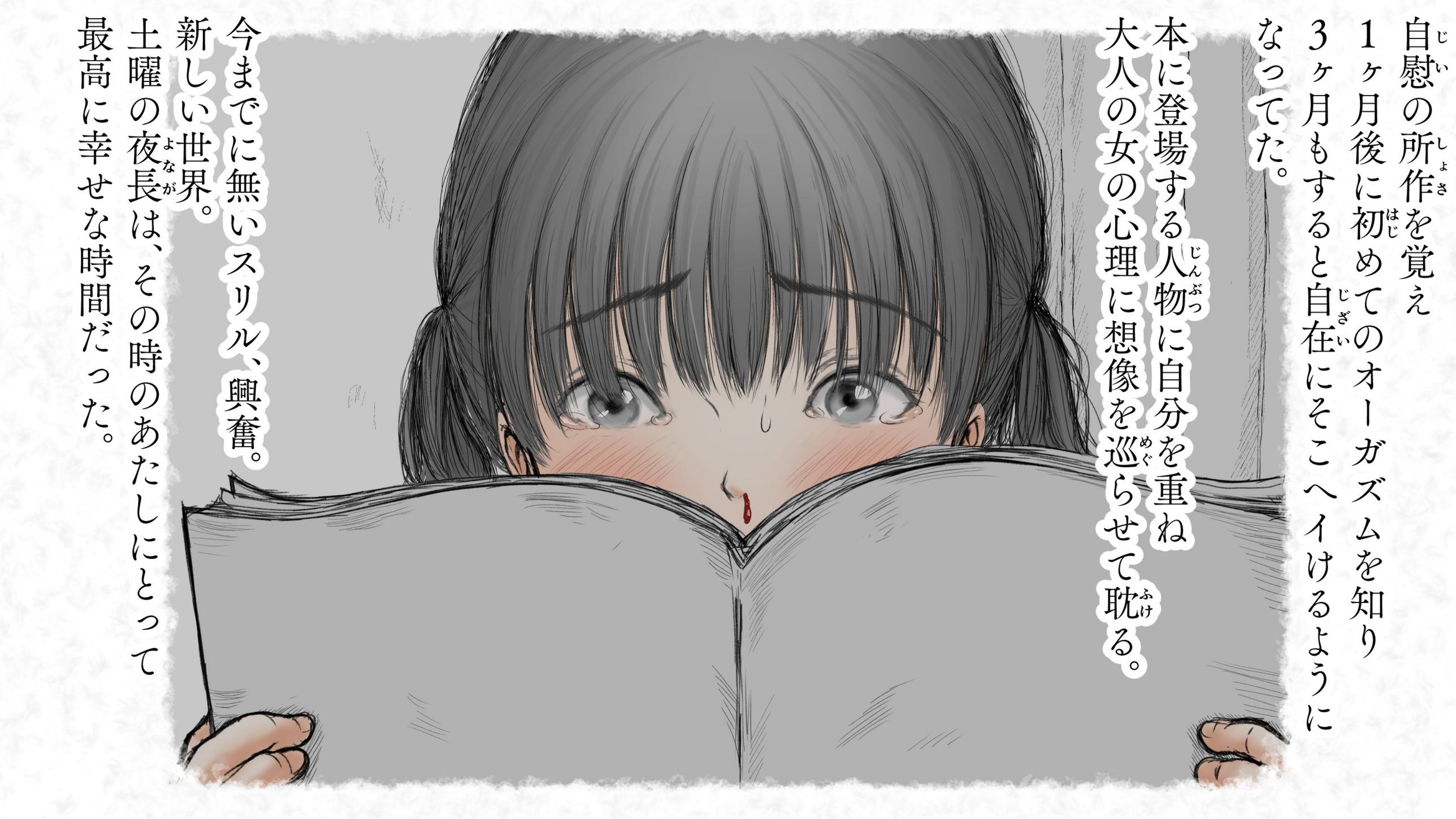
朝、おばあちゃんから
久しぶりに叔父さんが帰ってくると
聞いて、嬉しくて。

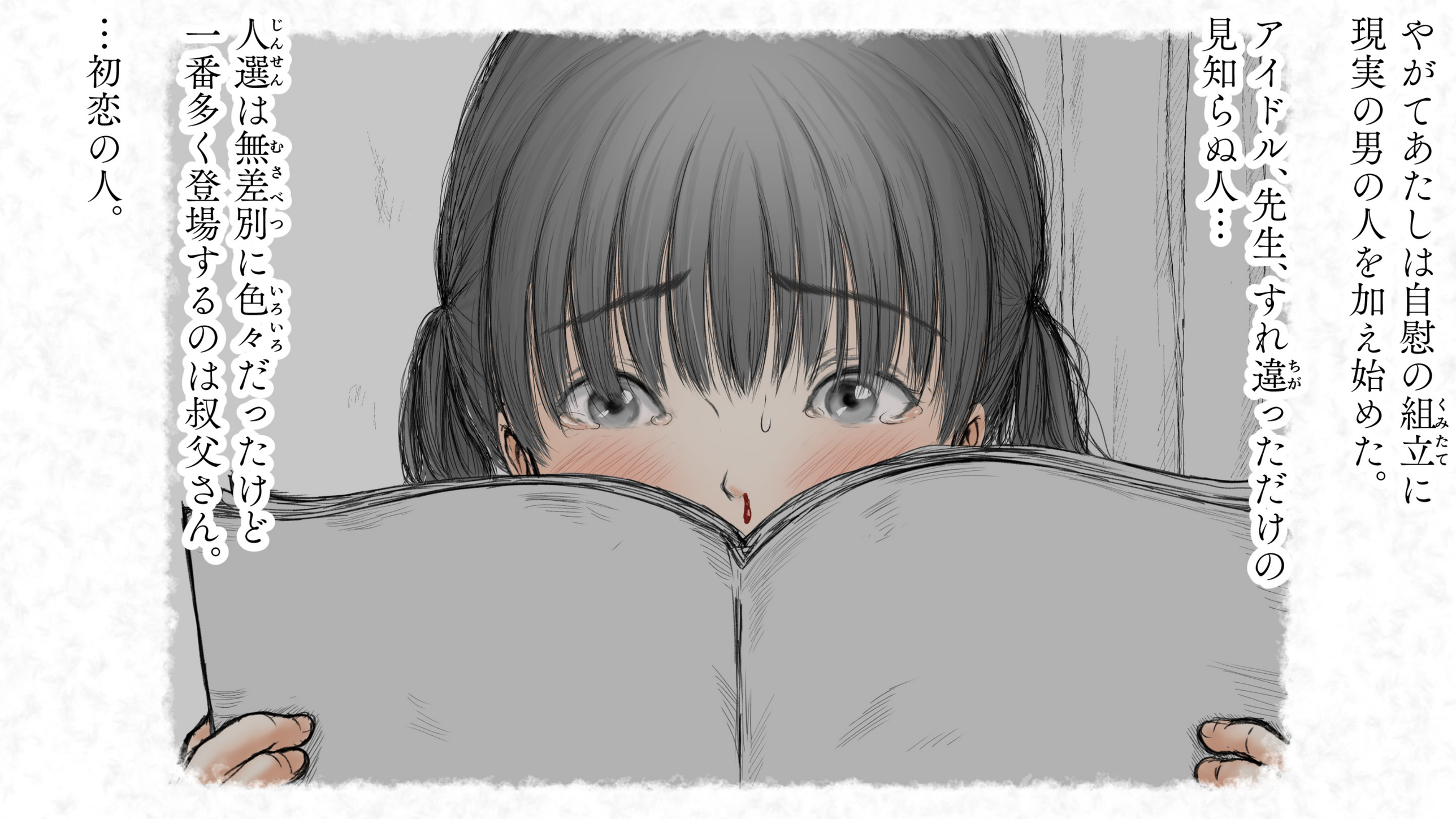


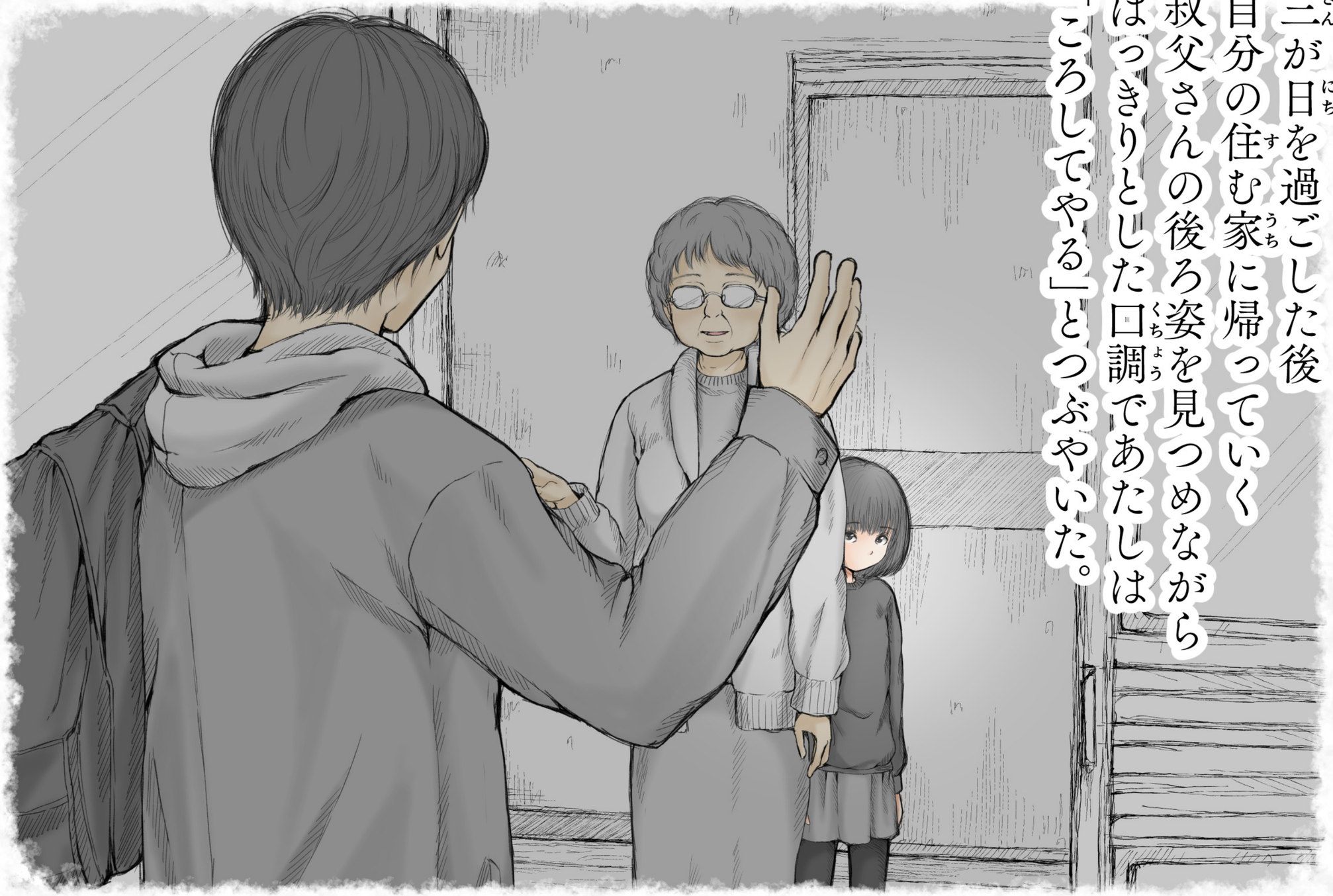
でもあたしはきっと怖がられてるから
安直に喜んでいいものか
不安でもあった。
長いけど経緯。

2Fのあたしの部屋は元々叔父さんが
使っていた部屋で
昔やったまま忘れてしまったのだろう、
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ぃ
たら…
押し入れの下段の板の裏にイケナイ本が
袋に入れてガムテで張り付けてあり
それを見つけた夜、あたしは性に目覚めた。
小3、まだ8歳の夏休みだった。

幼いあたしは、その本に
描かれているすべてを
大人の男の人が、叔父さんが
やりたい事だと思い込んだ。
全編過度にサディスティックで
子供心に傷を負っても
おかしくないそれら内容は
しかし、なぜかあたしにとって
『OK』だった。
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
じわ…
たら…

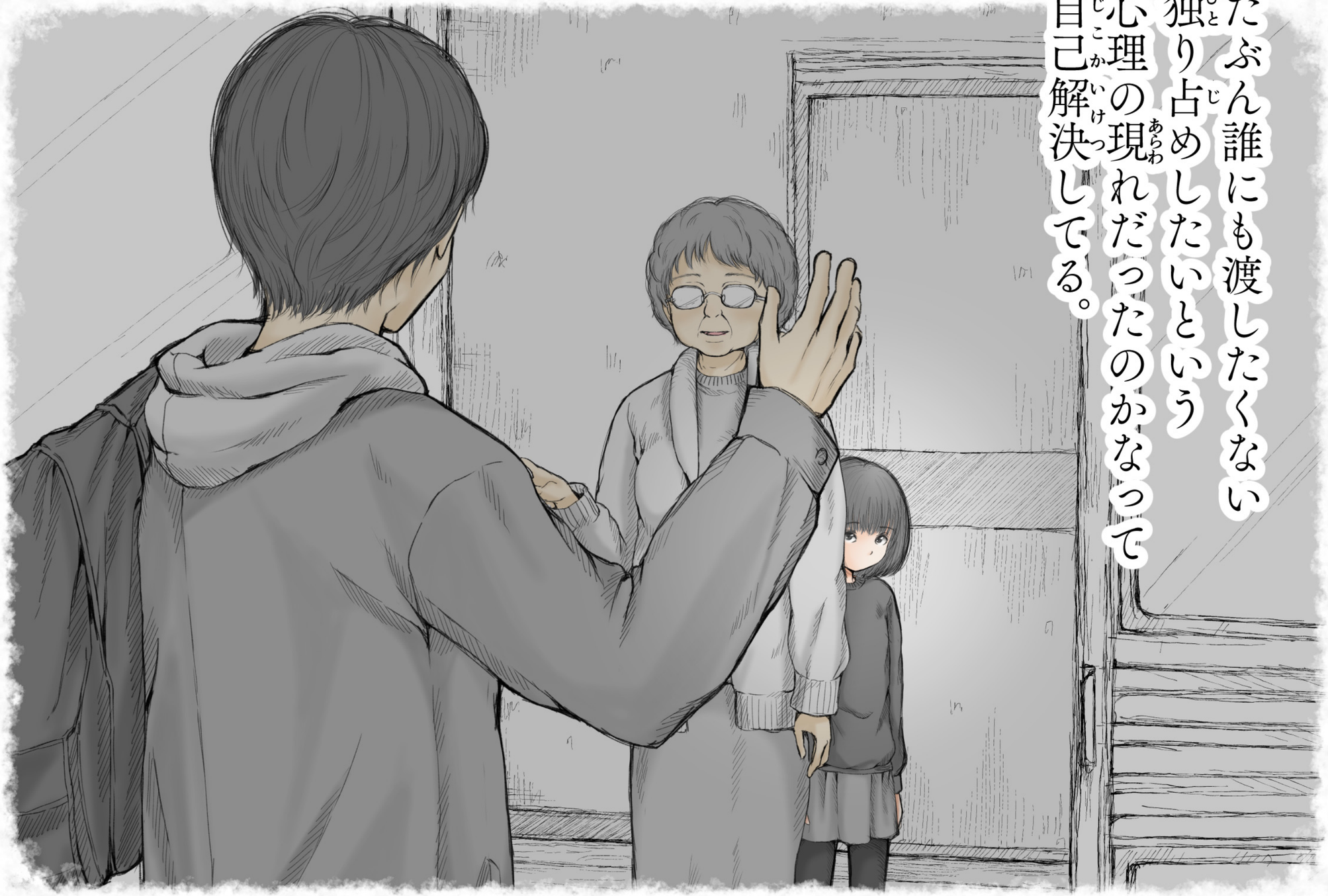

自慰の所作を覚え
1ヶ月後に初めてのオーガズムを知り
3ヶ月もすると自在にそこへイけるように
なってた。
本に登場する人物に自分を重ね
大人の女の心理に想像を巡らせて耽る。
今までに無いスリル、興奮。
新しい世界。
土曜の夜長は、その時のあたしにとって
最高に幸せな時間だった。


やがてあたしは自慰の組立に
現実の男の人を加え始めた。
アイドル、先生、すれ違っただけの
見知らぬ人…
人選は無差別に色々だったけど
一番多く登場するのは叔父さん。
…初恋の人。



あれは6歳の時。
…たぶんそのぐらい。
いつものように正月に帰省して
三が日を過ごした後
自分の住む家に帰っていく
叔父さんの後ろ姿を見つめながら
はっきりとした口調であたしは
「ころしてやる」とつぶやいた。

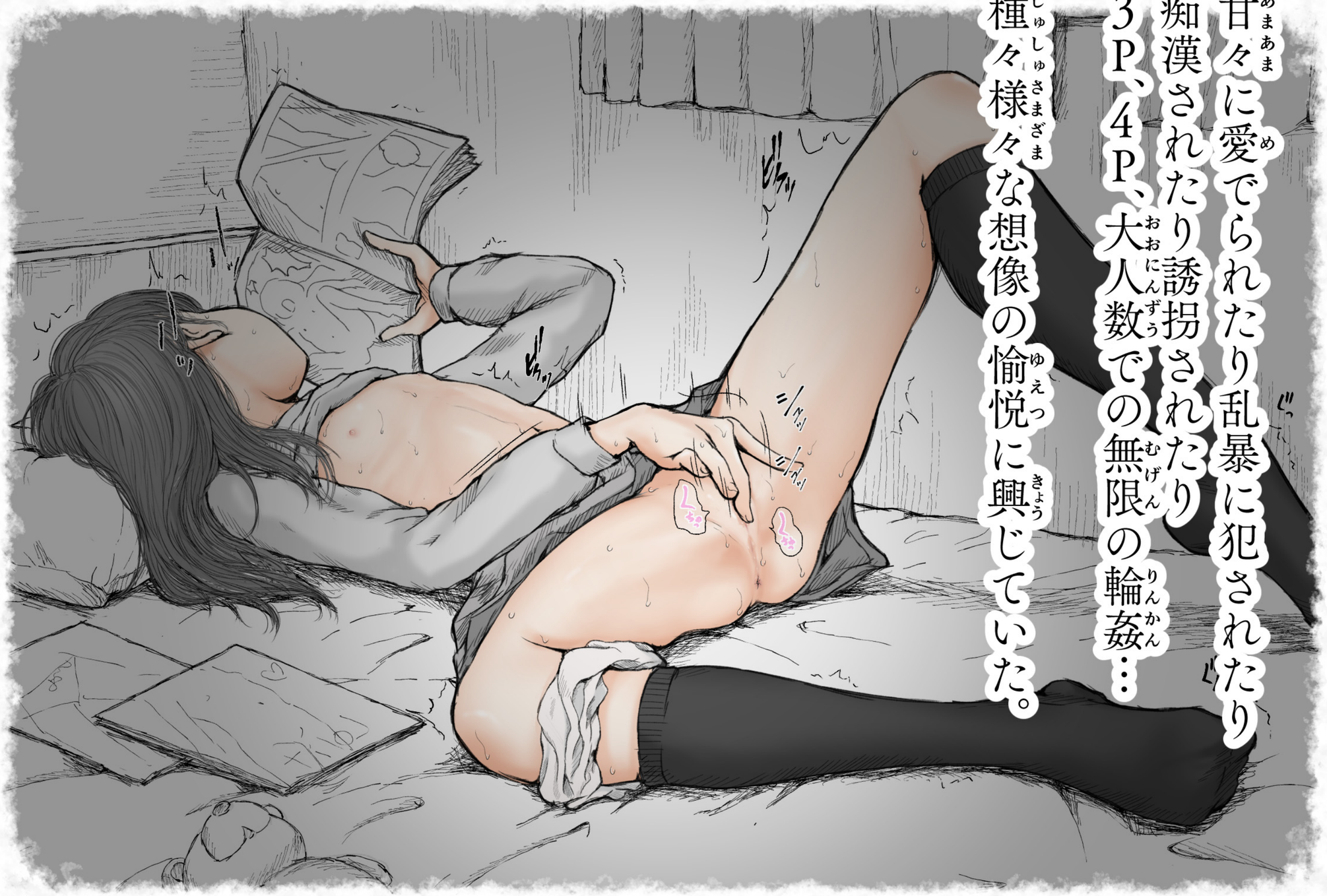
近くで聞いていたおばあちゃんの
苦笑いした顔を今も思い出す。



なんでそんな言葉が出たのかは
わからないんだけど
その記憶は明瞭にある。

たぶん誰にも渡したくない
独り占めしたいという
心理の現れだったのかなって
自己解決してる。

とにかくその頃から叔父さんを
好きになった。



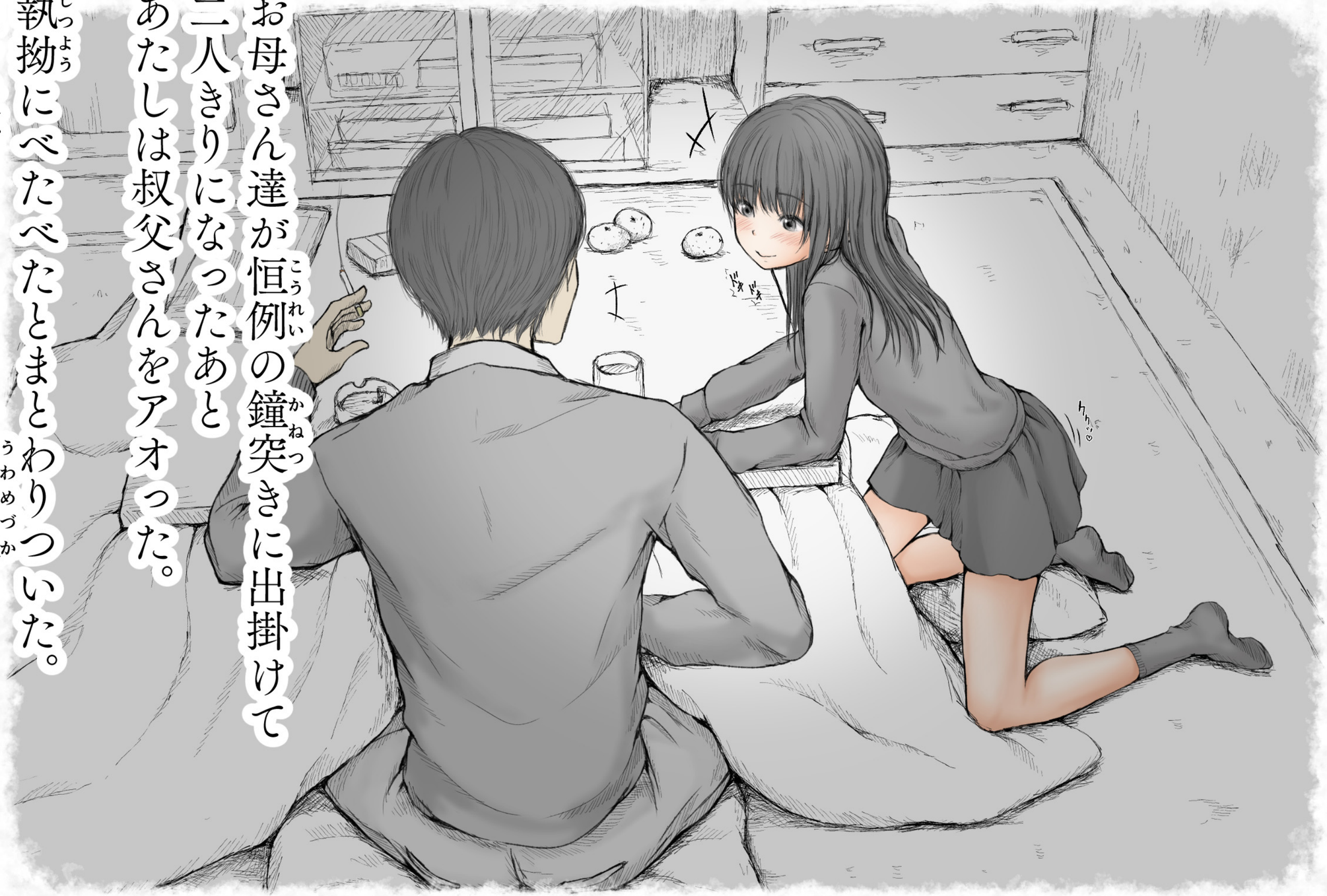
小1で叔父さんに初恋をして
小3で秘蔵本による性の開花。
4年生の頃には妄想世界の開拓も進み
甘々に愛でられたり乱暴に犯されたり
痴漢されたり誘拐されたり
3P、4P、大人数での無限の輪姦…
種々様々な想像の愉悦に興じていた。

そんな幼淫な日々の中で
やがて本当のセックスをしてみたい
それもなぜか
『子供の立場を乱用したい』と
そう強く想うようになった。
大好きな叔父さんとできるなら
最高だと思っていた。

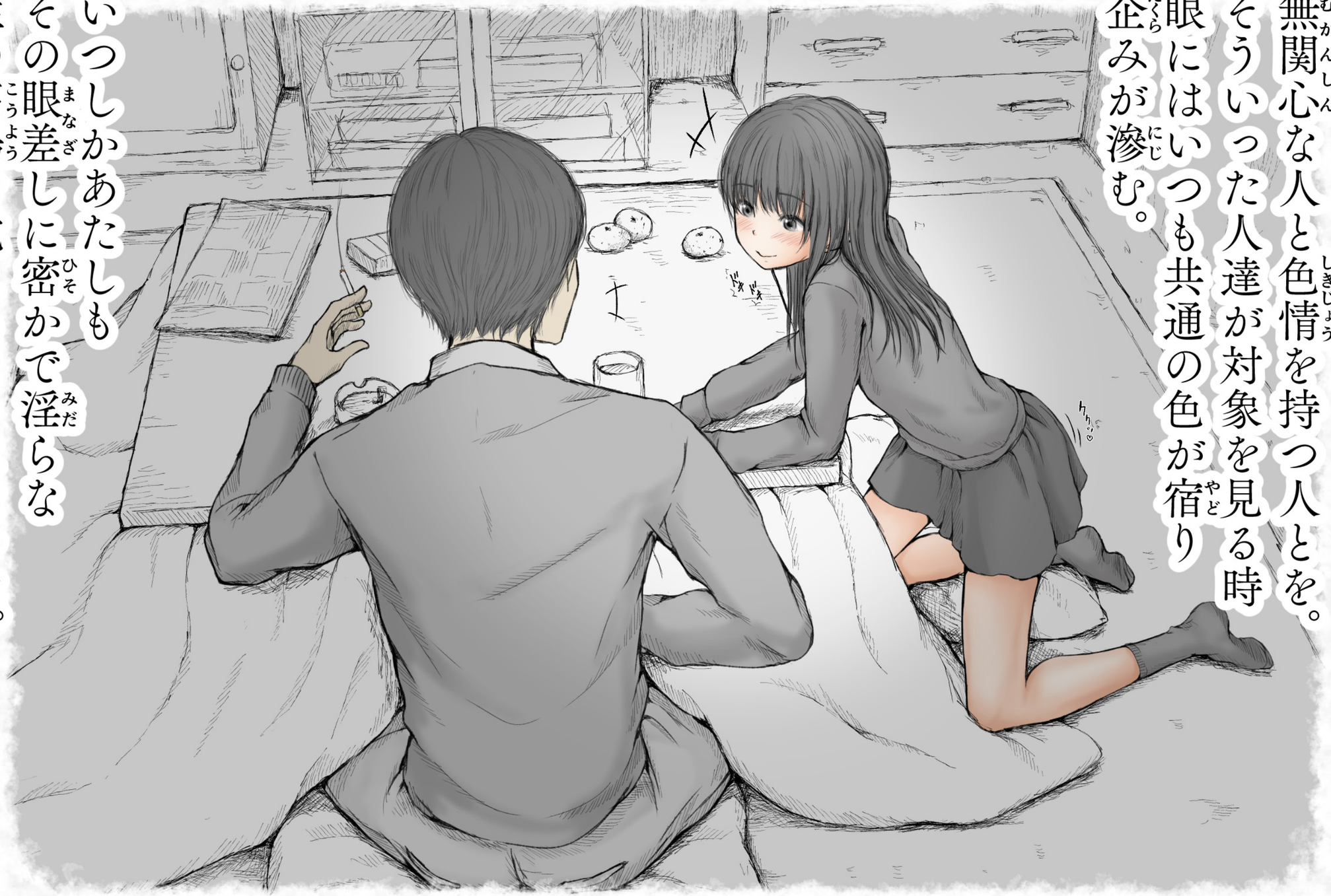
でも、叔父さんはあたしをどう
思ってるんだろうか。
小学4年生にせまられるのは
気持ち悪いだろうか。

普通の大人ならきっとそうだろう。
しかしアレ(薄い本)の持ち主は
当(とう)の叔父さん。
あんな事を好む…変人殿(へんじんどの)。
もしかすると
ノってくるかもしれない。
行動を起こせば
何かが起きるかもしれない。
勝手な算段(さんだん)に期待で胸が膨(ふく)らんだ。

そして待ちに待った大晦日の夜。
その年もいつも通りに
叔父さんは帰省して、炬燵でおしゃべり。

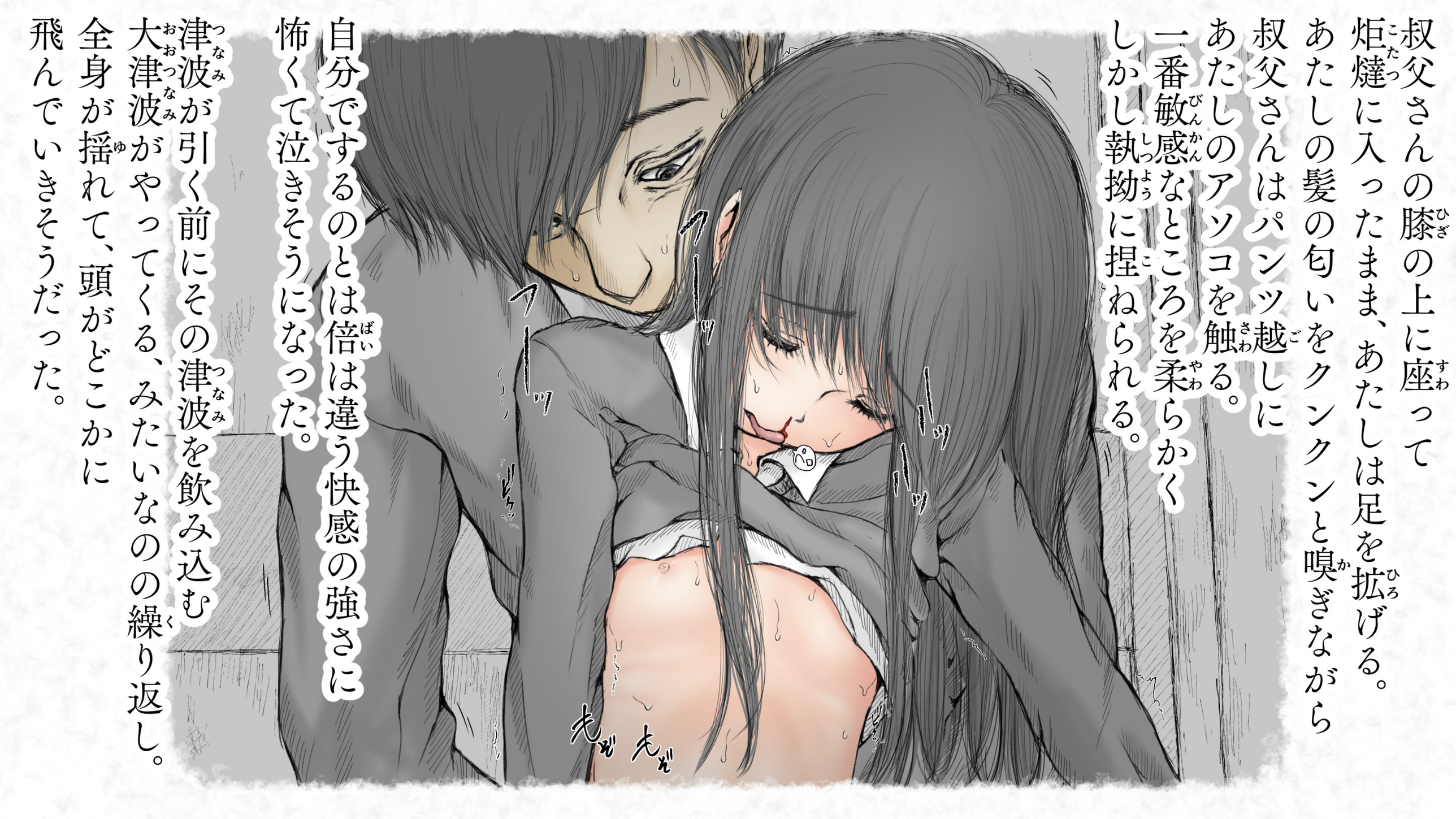


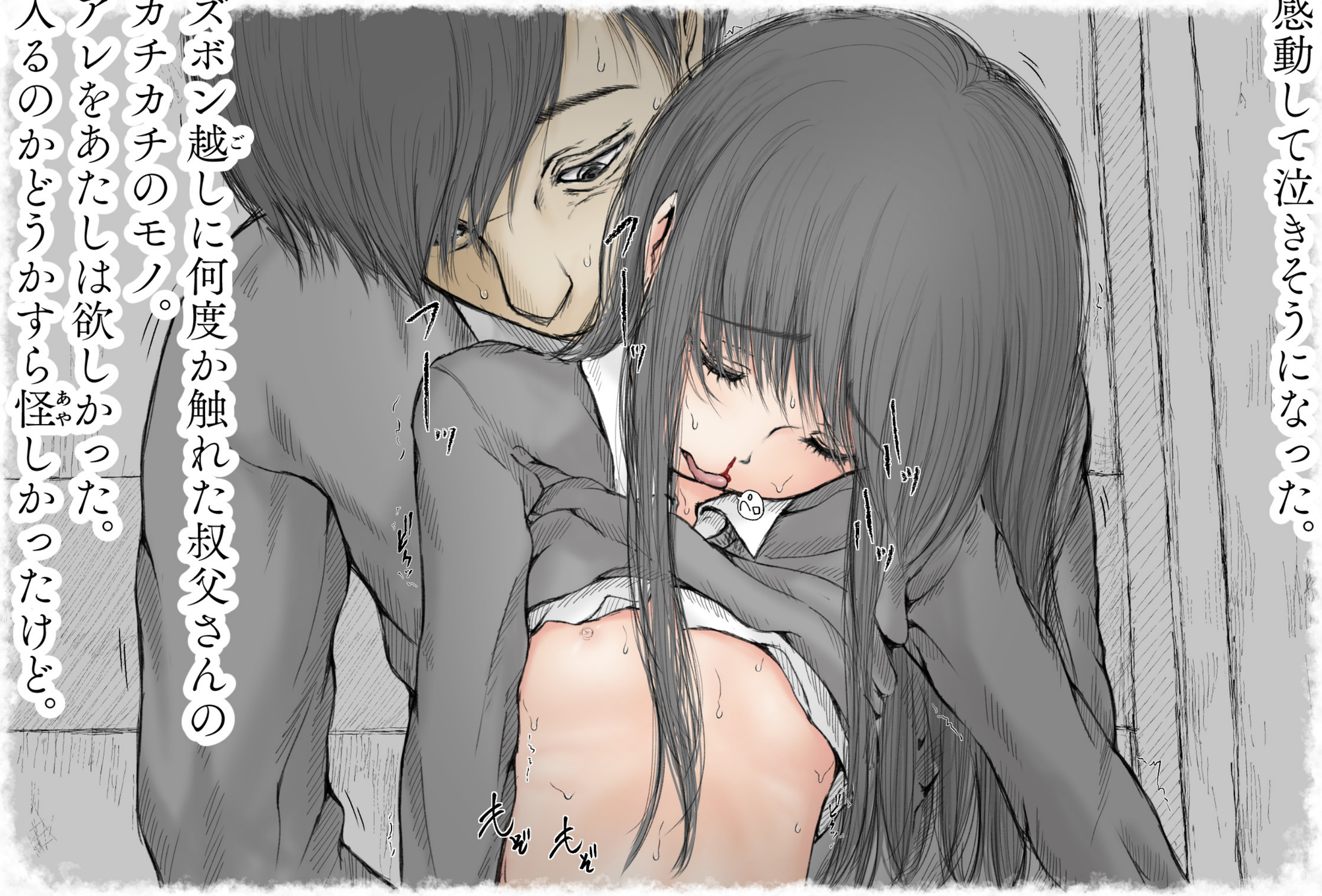
お母さん達が恒例の鐘突きに出掛けて
二人きりになったあと
あたしは叔父さんをアオった。
執拗にべたべたとまとわりついた。
顔を近づけてあざとい上目遣い
短いスカートを選んで
下着が見えそうに振る舞う。

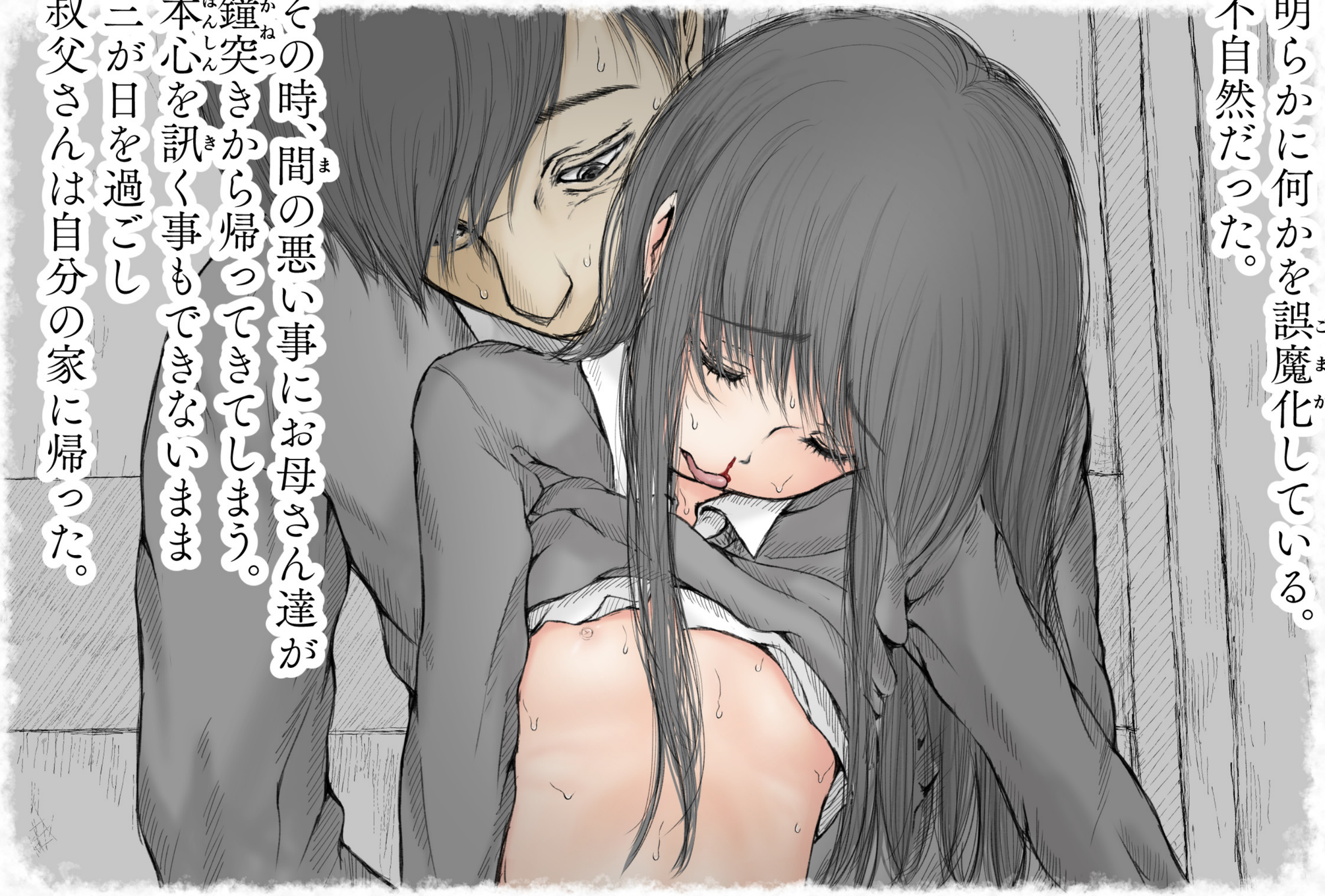

あたしはある頃から
判別できるようになった事がある。
子供のあたしに対して
無関心な人と色情を持つ人とを。
そういった人達が対象を見る時
眼にはいつも共通の色が宿り
企みが滲む。
いつしかあたしも
その眼差しに密かで淫らな
性の高揚を覚えるようになった。
早熟だなと自分でも思う。

それは『おじさん』の眼にも表れた。
やっぱりそうだった。
サド気質の人に多いらしい傾向。
叔父さんはその類の人だ。
あたしの事、『有り』だ。
下着が濡れるのが分かった。
あんなに興奮したのは
初めてイケナイ本を読んだ、あの夜以来だった。
鐘突きに行ったお母さん達が
帰ってきたら、事は進まなくなる。
また来年まで持ち越し。
気持ちが焦る。
隠してるつもりだったけど
たぶんバレバレだったと思う。

本や妄想と現実は違う
それはちゃんと区別していた。
仮にあたしが、叔父さんが食指を
伸ばすに足る素材だとして
一体どの程度まで
叔父さんはするだろう。
したいと思っているだろう。
じゃれ合って偶然を装い
触ってくる…
そんな戯れ事ヤダ。
ちゃんと大人の本当のやつをしたい。
不安は杞憂に、現実はあたしの
望んだままに進んでいった。


叔父さんの膝の上に座って
炬燵に入ったまま、あたしは足を拡げる。
あたしの髪の匂いをクンクンと嗅ぎながら
叔父さんはパンツ越しに
あたしのアソコを触る。
一番敏感なところを柔らかく
しかし執拗に捏ねられる。
自分でするのとは倍は違う快感の強さに
怖くて泣きそうになった。
津波が引く前にその津波を飲み込む
大津波がやってくる、みたいなのの繰り返し。
全身が揺れて、頭がどこかに
飛んでいきそうだった。

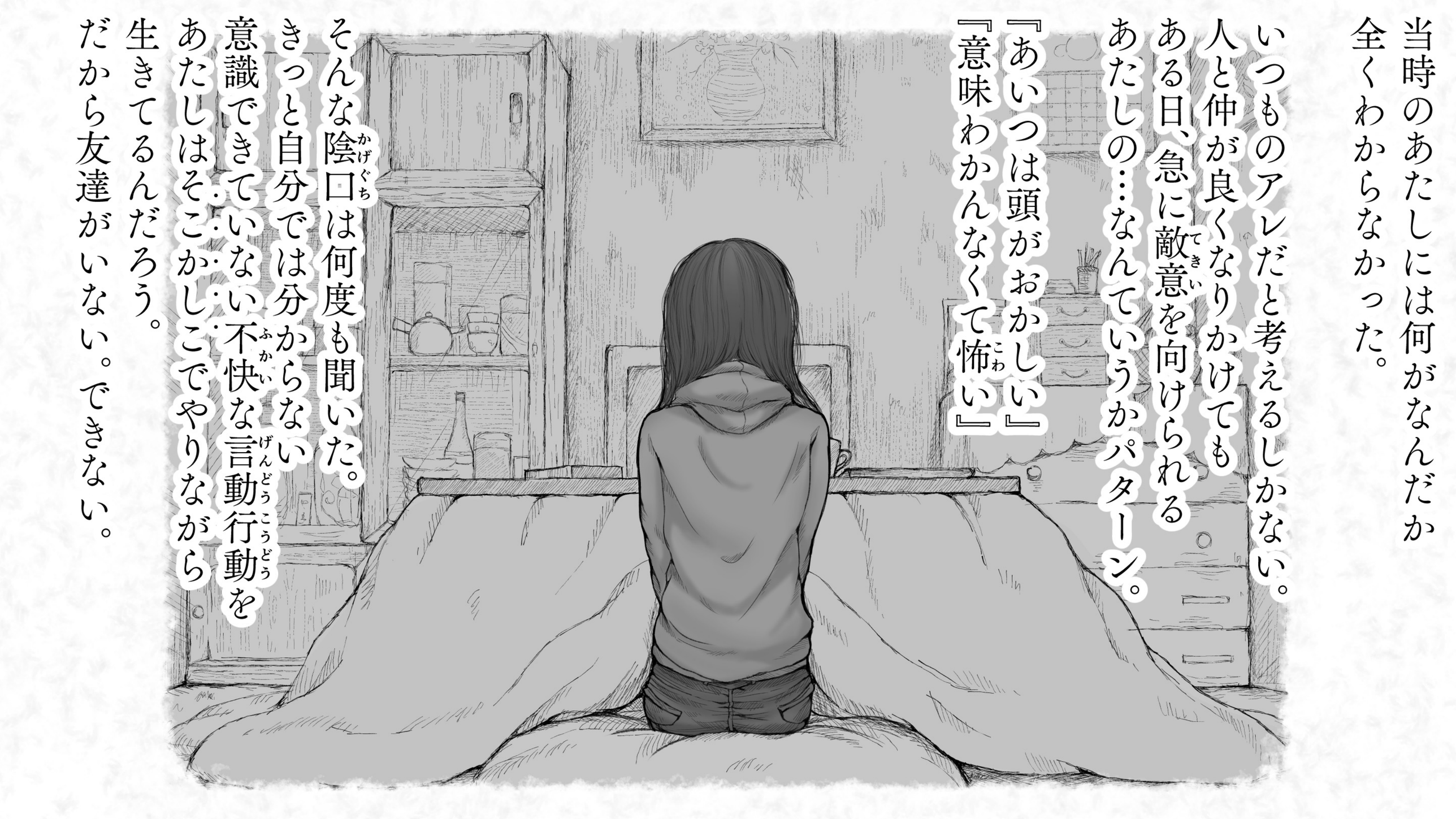

ペロ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

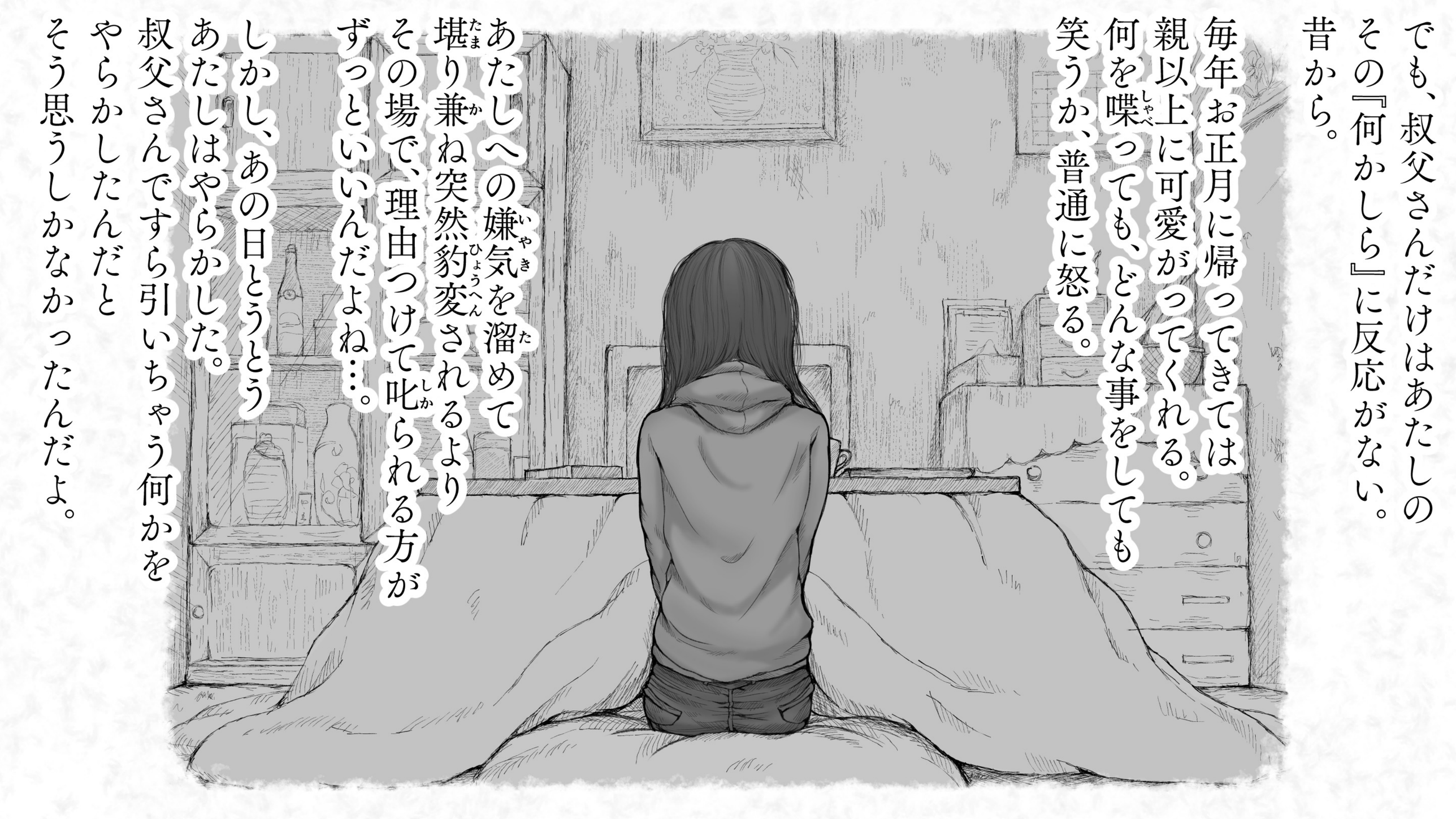


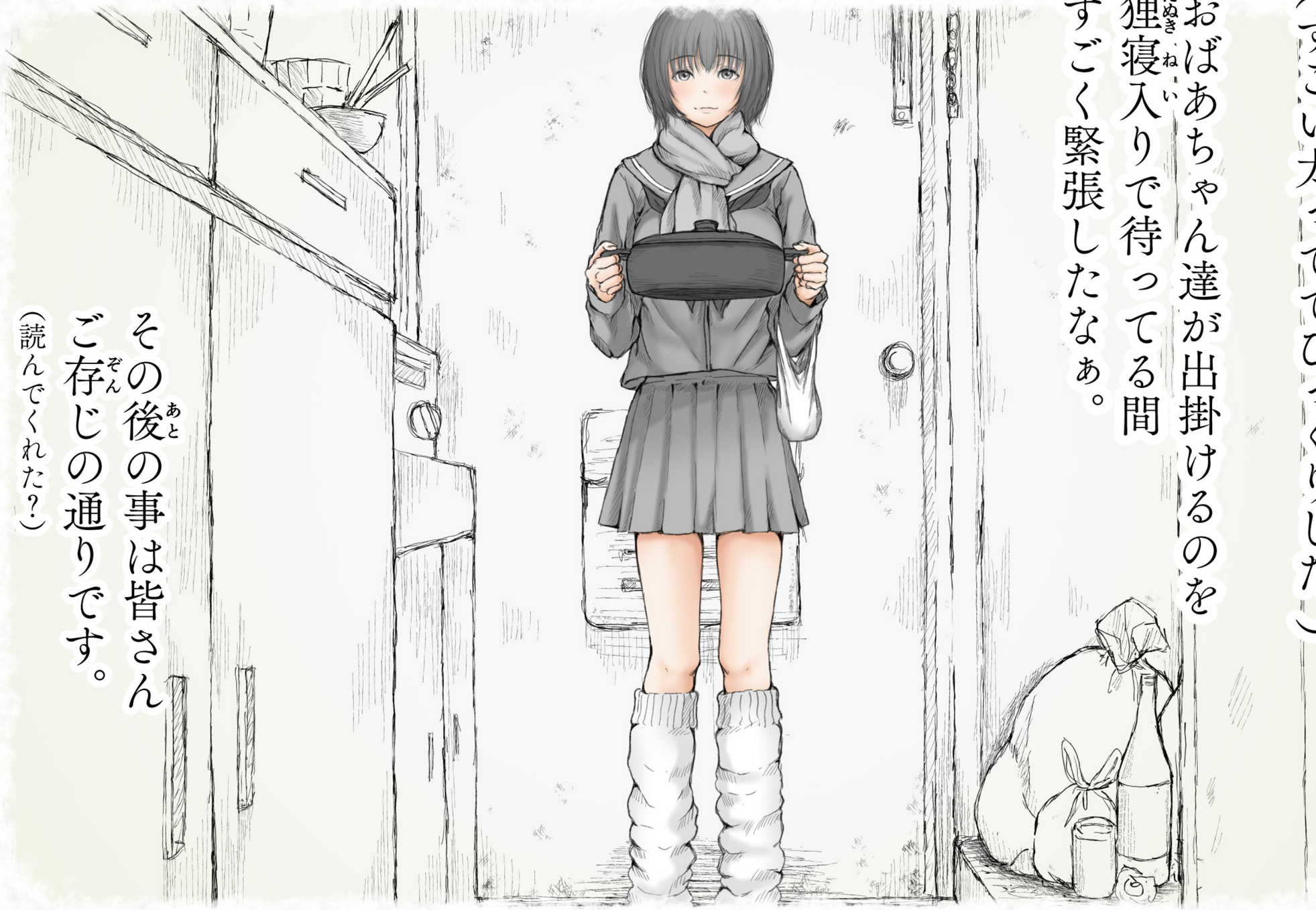
でもそれを求めた途端
叔父さんは眼から滲みを消した。
小学生だからまだ駄目と言っていたけど
明らかに何かを誤魔化している。
不自然だった。

その時、間の悪い事にお母さん達が
鐘突きから帰ってきてしまう。
本心を訊く事もできないまま
三が日を過ごし
叔父さんは自分の家に帰った。

そして…
叔父さんは帰省しなくなった。


当時のあたしには何がなんだか
全くわからなかった。
いつものアレだと考えるしかない。
人と仲が良くなりかけても
ある日、急に敵意を向けられる
あたしの…なんていうかパターン。
『あいつは頭がおかしい』
『意味わかんなくて怖い』
そんな陰口は何度も聞いた。
きっと自分では分からない
意識できていない不快な言動行動を
あたしはそこかしこでやりながら
生きてるんだろう。
だから友達がいない。できない。


でも、叔父さんだけはあたしの
その『何かしら』に反応がない。
昔から。
毎年お正月に帰ってきては
親以上に可愛がってくれる。
何を喋っても、どんな事をしても
笑うか、普通に怒る。
あたしへの嫌気を溜めて
堪り兼ね突然豹変されるより
その場で、理由つけて叱られる方が
ずっといいんだよね…。
しかし、あの日とうとう
あたしはやらかした。
叔父さんですら引いちゃう何かを
やらかしたんだと
そう思うしかなかったんだよ。

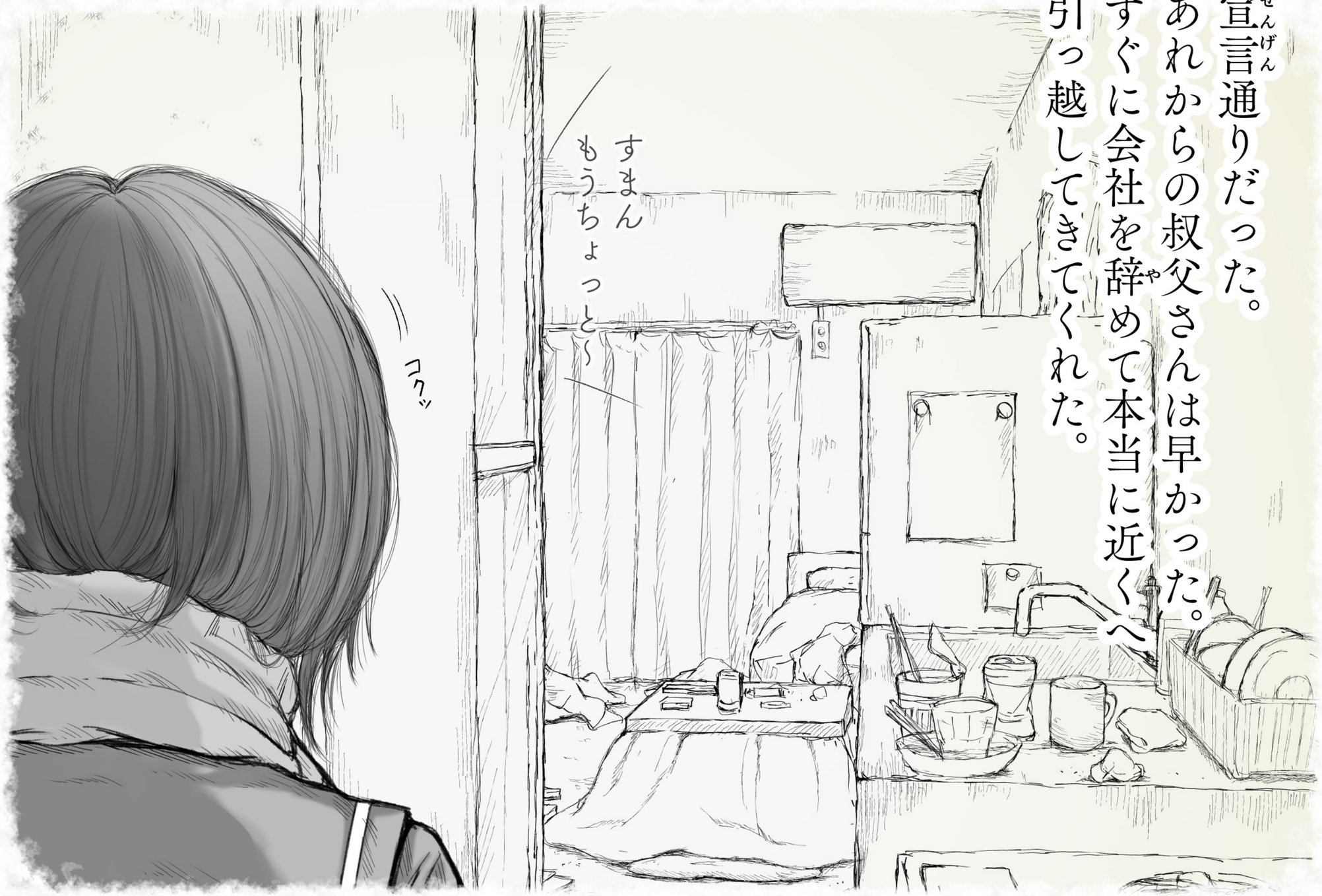


それから3年後の年の瀬。
叔父さんは久しぶりに
帰ってきてくれた。
（すごい太っててびっくりした。）
おばあちゃん達が出掛けるのを
狸寝入りで待ってる間
すごく緊張したなぁ。

その後の事は皆さん
ご存じの通りです。
（読んでくれた？）

『時間をくれ。
痩せて、生活基盤を近くに移して
改めて俺から告白しに参る。』

宣言通りだった。
あれからの叔父さんは早かった。
すぐに会社を辞めて本当に近くへ
引っ越してきてくれた。



別にお腹ブヨブヨのままでもいいのに
無理やり絶食ダイエットして
昔みたいにスリムになり
ケーキとメリーチョコと
バラの花束を携え、正装で告白された。
叔父さんには叔父さんなりの
『恋人への流儀』があるらしい。
それが今月頭、3週間ほど前の事。
あたしは嬉し過ぎて本当に
気を失ったんだよ。

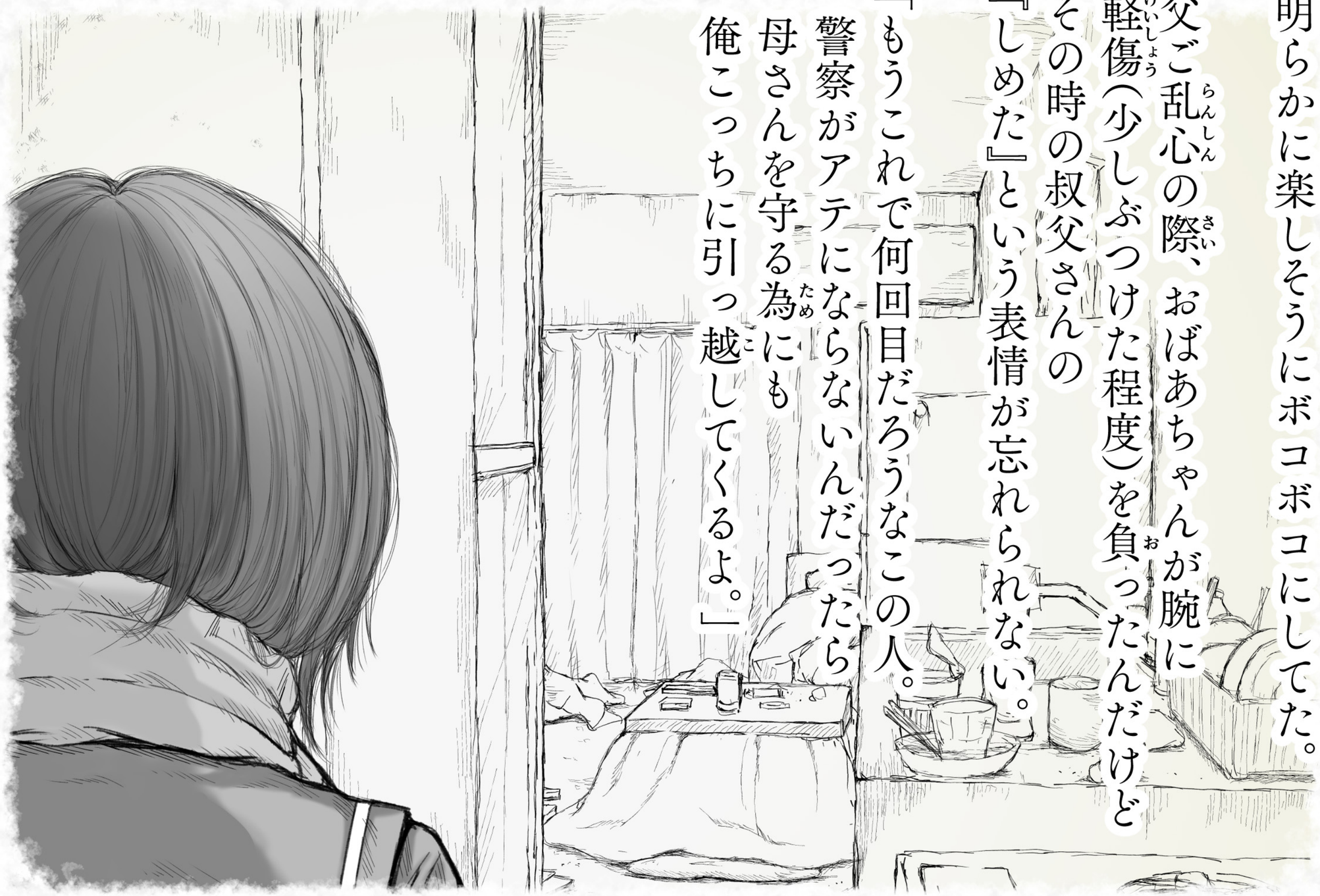
すまん
もうちょっと〜

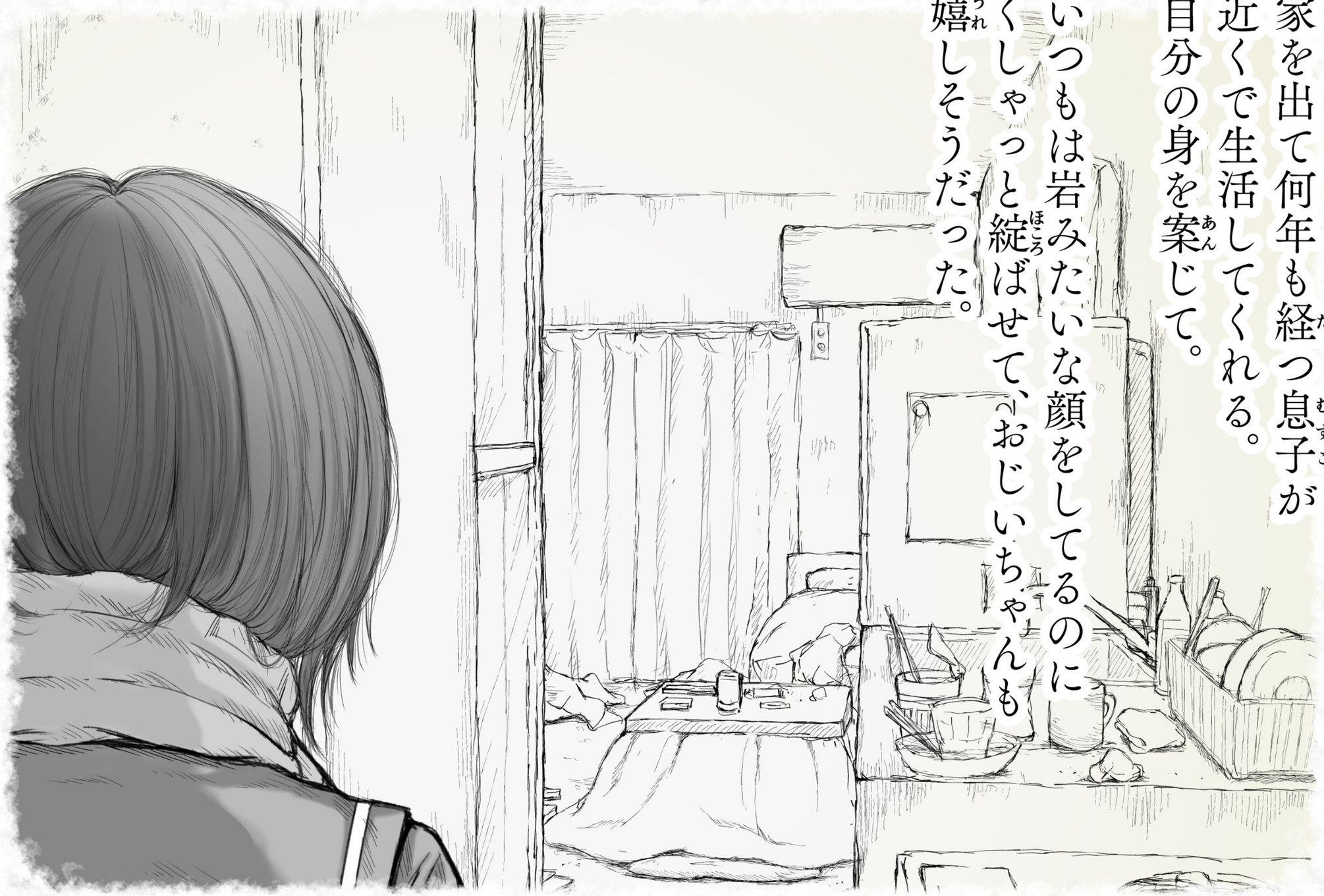
コクッ

ちなみに叔父さんの引っ越しには
追い風が吹いた。

（関係を結んだ後）三が日を終えて
帰ろうとする叔父さんとすれ違いで
泥酔した父親、元父親が
お母さんを訪ねてきた。

お母さんはもう何ヶ月も前から
それこそ去年から
身を隠すというていで
新しい彼氏と暮らしていて
家に居ない事を知ったお父さんは
逆上した。


お父さんの素行をよく知っている
叔父さんは、近くで待機していて
案の定暴れ始めた酔っ払いを
明らかに楽しそうにボコボコにしてた。
父ご乱心の際、おばあちゃんが腕に
軽傷(少しぶつけた程度)を負ったんだけど
その時の叔父さんの
『しめた』という表情が忘れられない。
「もうこれで何回目だろうなこの人。
警察がアテにならないんだったら
母さんを守る為にも
俺こっちに引っ越してくるよ。」



おばあちゃんは喜(よろこ)んでた。
そりゃそうだよね。
孫(あたし)が産まれるきっかけで
家を出て何年も経(た)つ息子(むすこ)が
近くで生活してくれる。
自分の身を案(あん)じて。
いつもは岩みたいな顔をしてるのに
くしゃっと綻(ほころ)ばせて、おじいちゃんも
嬉(うれ)しそうだった。

叔父さんはまんまと
誰にも警戒される事無く

順風満帆な社会生活の近況的には
就職氷河期と言われてるらしい昨今に
不釣り合いな動機の転職と

部屋が余っているのに
わざわざ余計な出費が生じるアパートを
実家の近所に借りるという
やや不自然な引っ越しを完了させた。

あたしだけが真意を知ってる。
叔父さんは、いろいろなものを捨てて…

あたし姪との秘ひめた関係を選んだ。
選んでくれた…
はあ
はあ
はあ
ドキ
ドキ
ぐっ

「お待たせ。」
「あ…鍋あぶない…」

「よーしよし
ちゃんとノーブラで来たな～♪
この部屋を訪ねる時は
下着非着用な～♪
なんか最近さ
急に冬に戻ったみたいだよな。

外寒かったろ？
おっぱい鳥肌立ってんじゃん。
すぐ暖めてやるからな。」
「なべ…」
「ほらナベ、いやべロ出せ。」
「……ん…」
ふいに始まった幸せな日々♪
でもね、少しだけ困ってる事が
あるんだよ。

お正月に初めてセックスしてから
この3月まで二度目は無かった。

機会を作ろうと思えば
いくらでもできた筈なんだけど
叔父さんは頑なにそうしなかった。

何か思う所があるのがわかるし
それは大人の複雑な事情から
発するものかもしれなくて
中学生のあたしが軽々しく
意見する事ではないとも思った。

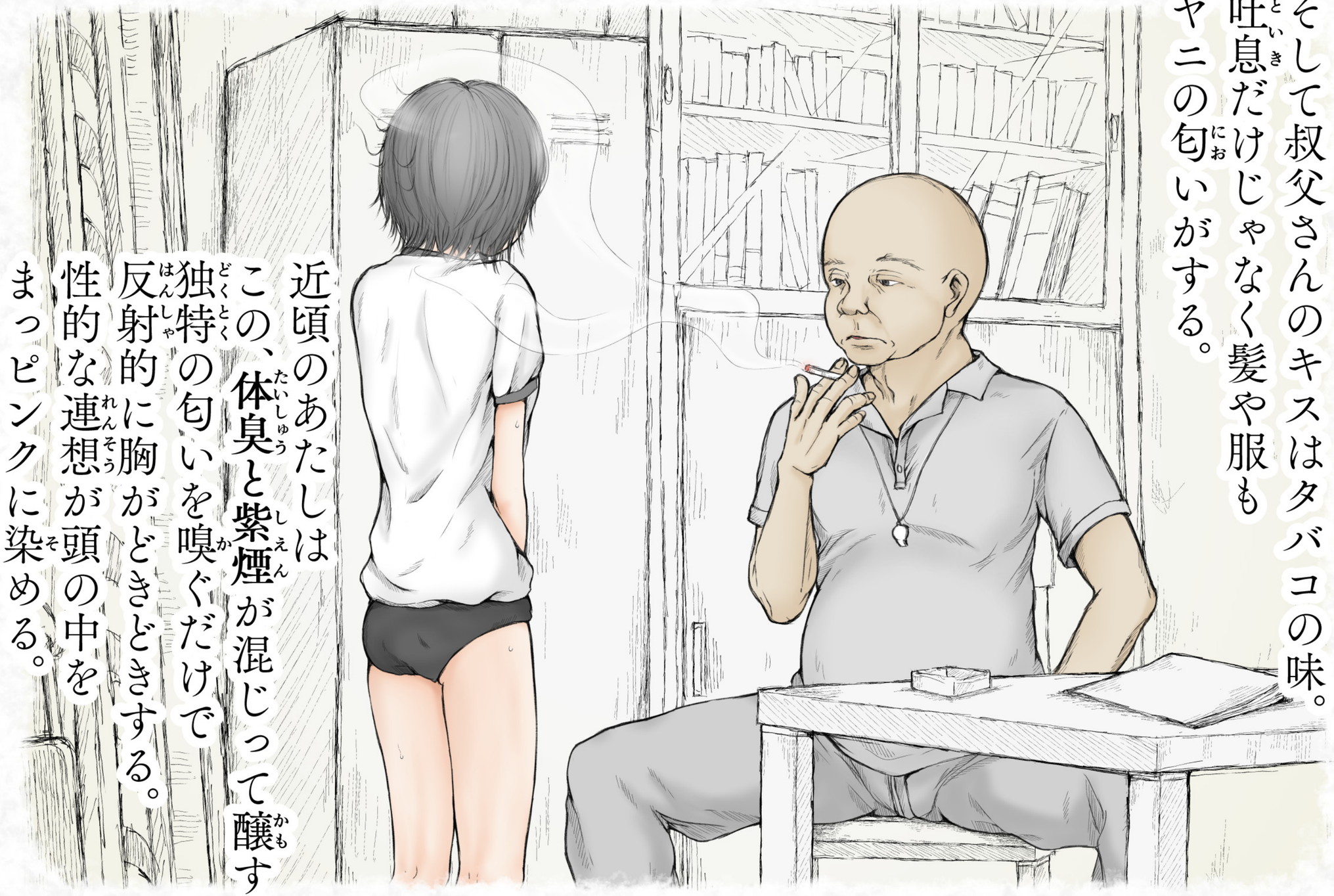
そして今月に入って
やっと1回…してもらえた…。
土曜日の夜に
家を抜け出しこのアパートで。

関係の約束。
『学業に支障をきたさない。』
『会う為に強引な事をしない。』
叔父さんが決めたこのルールに
則って機会を伺うと
行為に到れるのは
叔父さんの仕事のシフトとかみ合う
土曜日の夜だけになる。
それも時間にして2時間ぐらい。

叔父さんは、じらそうとしてやっているのか今までの経験則に実直に従っているだけなのか…
セックスの多幸さを覚えた直後にこんなに間隔を空けられさらには自宅での自慰をも禁じられ…(不服!!)
わかるよね
『堪らない』んだよ。
お正月からずっとそうなんだよ。
ぶる ぶる
アッ♡
アッ♡
アッ♡
むぱ
むぱ
くに くに

常時発情。授業中だって発情。
もぞもぞ落ち着かなくて
勉強どころじゃない。
むしろ学業に支障をきたしてるんだよ。
見る夢はことごとくミダラ。
女でも夢精ってあるのかな？

そしたらちょっとは生活が
楽になるはず。
夢精なら自慰じゃないから
言いつけを破ってない。
夢精を切望して
眠りにつく女子中学生なんて
普通じゃないんだよ。

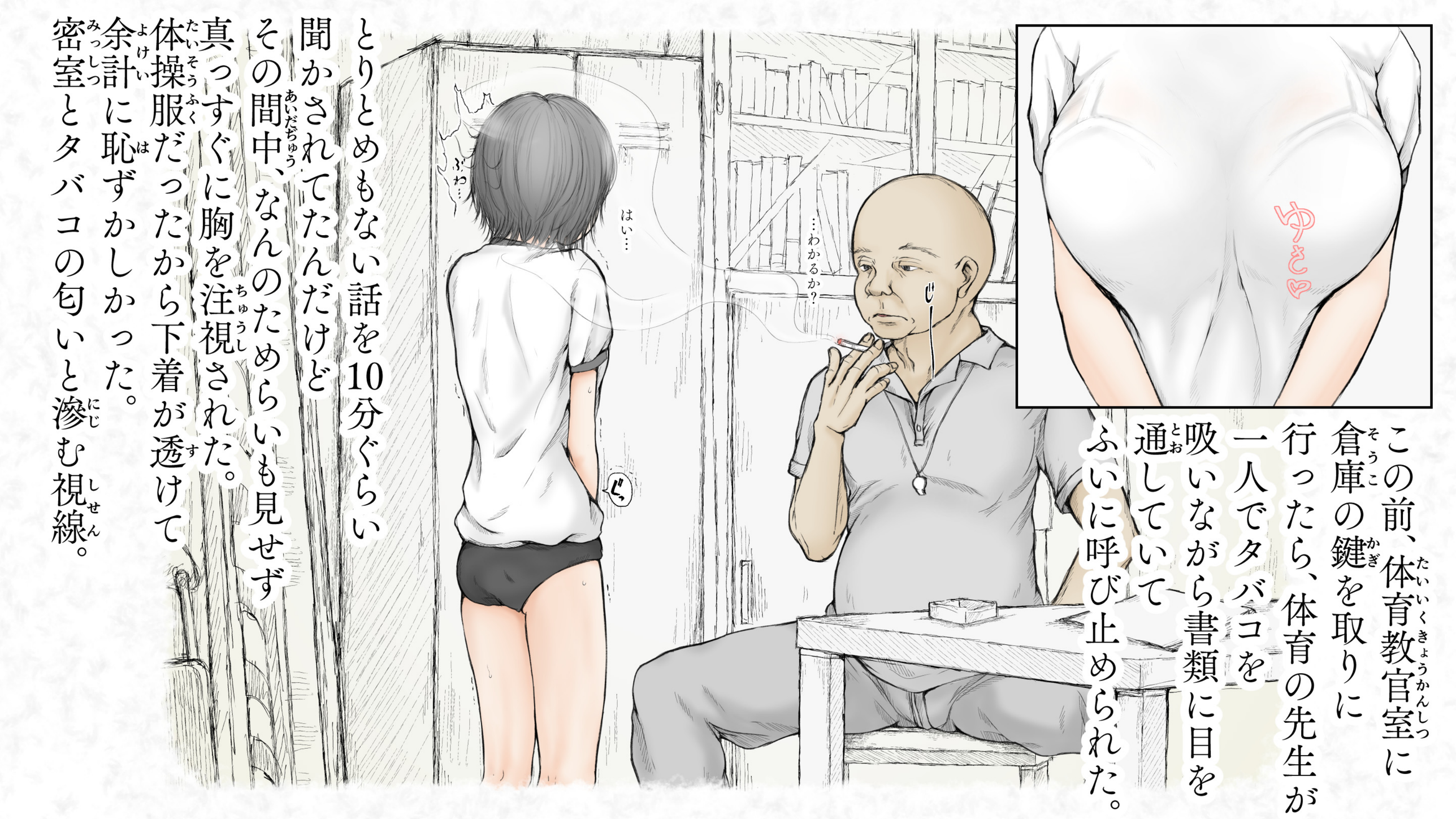


あたしはキスが好き。
叔父さんによくねだる。

そして叔父さんのキスはタバコの味。
吐息だけじゃなく髪や服も
ヤニの匂いがする。

近頃のあたしは
この、体臭と紫煙が混じって醸す
独特の匂いを嗅ぐだけで
反射的に胸がどきどきする。
性的な連想が頭の中を
まっピンクに染める。

パブロフの♀犬だ。

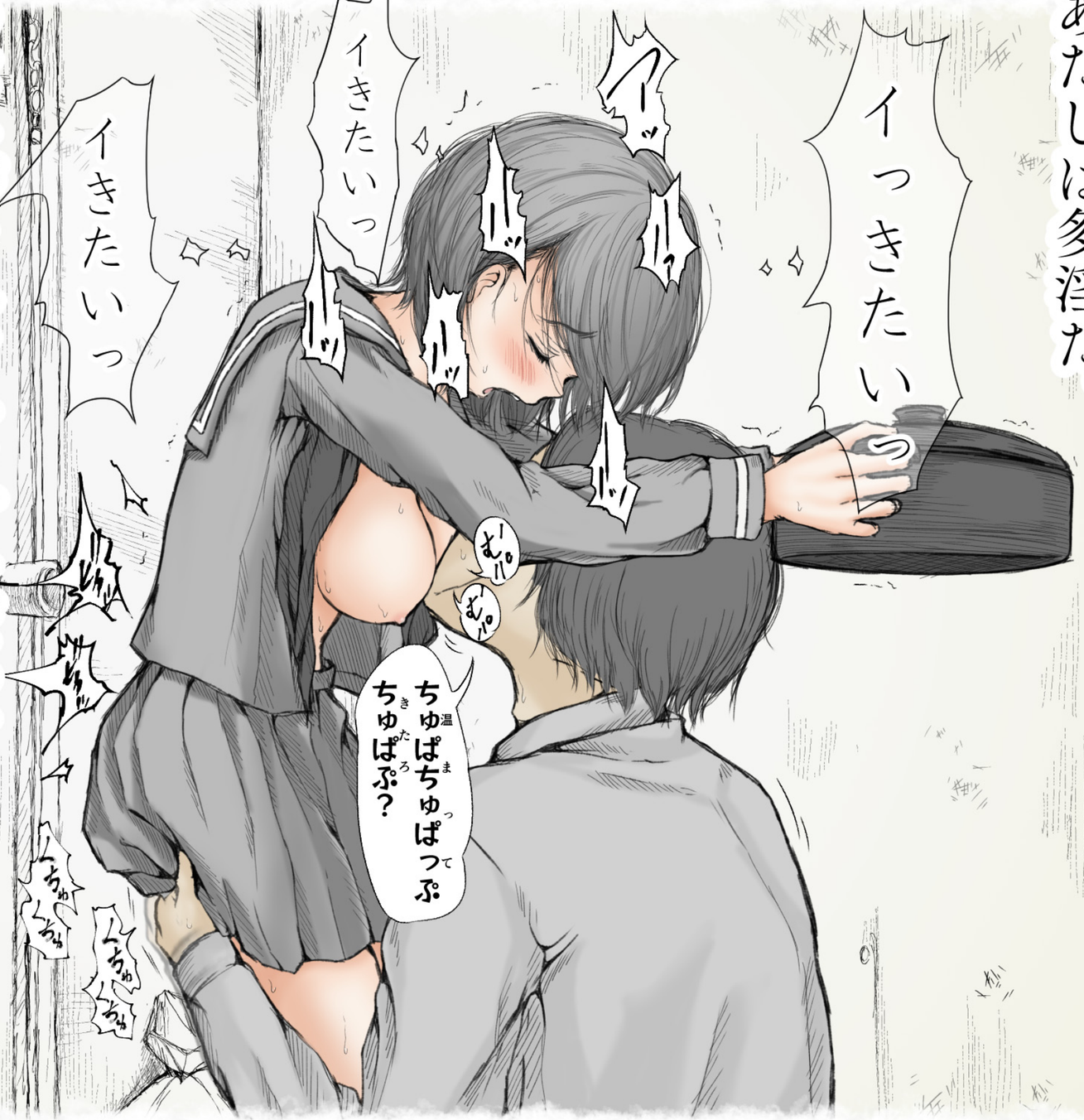


この前、体育教官室に
倉庫の鍵を取りに
行ったら、体育の先生が
一人でタバコを
吸いながら書類に目を
通していて
ふいに呼び止められた。

とりとめもない話を10分ぐらい
聞かされてたんだけど
その間中、なんのためらいも見せず
真っすぐに胸を注視された。
体操服だったから下着が透けて
余計に恥ずかしかった。
密室とタバコの匂いと滲む視線。

叔父さんに自慰禁されてなかったら
はしたなくも、それを燃料にして
その夜何回もしてたと思う。

あたしは多淫だ。



あたしがそんなエロガキだって
見抜いてる叔父さんは
いつもこんなふうに
身体のいろんなところに火をつけて
でも決してイかさないように
加減して遊ぶ。
…遊んでるに違いない。

近頃、さすがにキツい…。

なぁなんでだ？なんで身体小さいのに胸だけこんなに先行してるんだ？
イきたい
またそれ言う…し、知らない…よ…
この体型…には…困ってるんだよ…
イきたい
シちゅう～♪シちゅう～～♪
きい…てる？
もむ♡
もむ♡
ふるふる

も、むりっ
ねえ…ねえっ イきたいよっ
イってもいいって言って…
だぁめぇ～～♪
ビクッ
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ
イッくっ！
イくっ イくっ♡
ねえっ！お願い…だよ…
だぁ～♡～～めぇ～♡
再来週の土曜日までお♡あ♡ず♡…
もむ♡
もむ♡

ねえ…ねえっ イきたいよっ
も、むりっ
イってもいいって言って…
だぁめぇ～～♪
もむ♡
もむ♡
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
イッくっ！
イくっ イくっ♡
ねえっ！お願い…だよ…
だぁ～♡～～め
再来週の土曜日
お♡あ♡ず♡
たー
グッ

首だいじょうぶ？
うん
大丈夫
…おいしい？
おいしい
…あたしの胸から
おいしいシチュー
出たら嬉しい？
嬉しいってか
便利だなと思う
…具はどうなんの？
ぐ？
ぐ
ぐって？
シチューの具だよ
乳腺通るの？
通らないに
決まってる

叔父と姪という近親
大人と子供という背徳
…の恋愛。

そんなあたし達を勘ぐる可能性があって
勘ぐられてマズイ相手は
お母さん、おばあちゃん、おじいちゃん。
お母さんは件の理由で居ないし
おじいちゃんはあたしに関心が無いから
一番気をつけなきゃいけないのは
おばあちゃん。

おばあちゃんの中で何らかの疑念が
芽生えた時
思い返す記憶の中に確信に到る
『出来事』を残さない為に

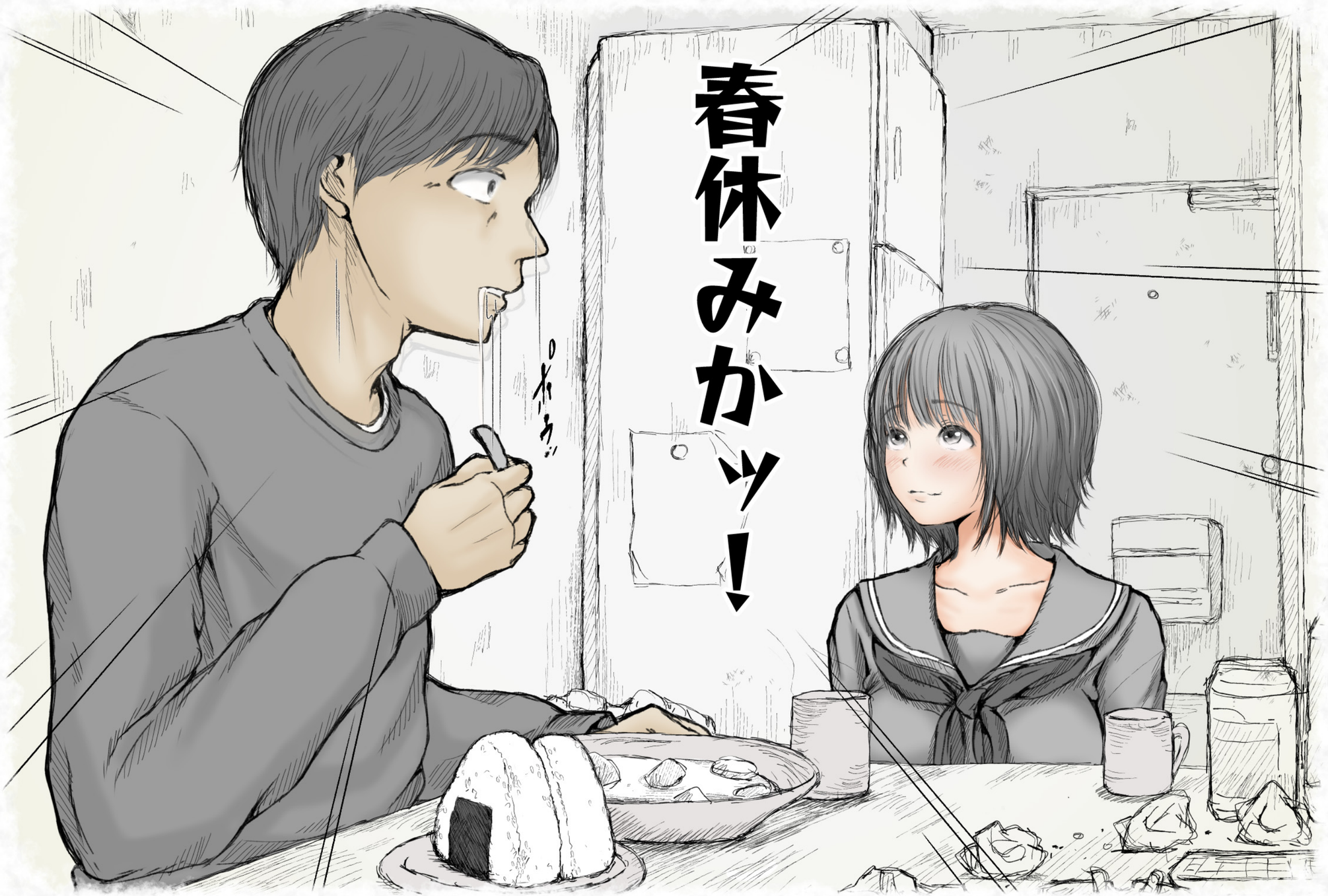
こういった、ふいに会えた時こそ
そっけない程とっとと帰宅してきた
そんな痕跡にしなければならない。

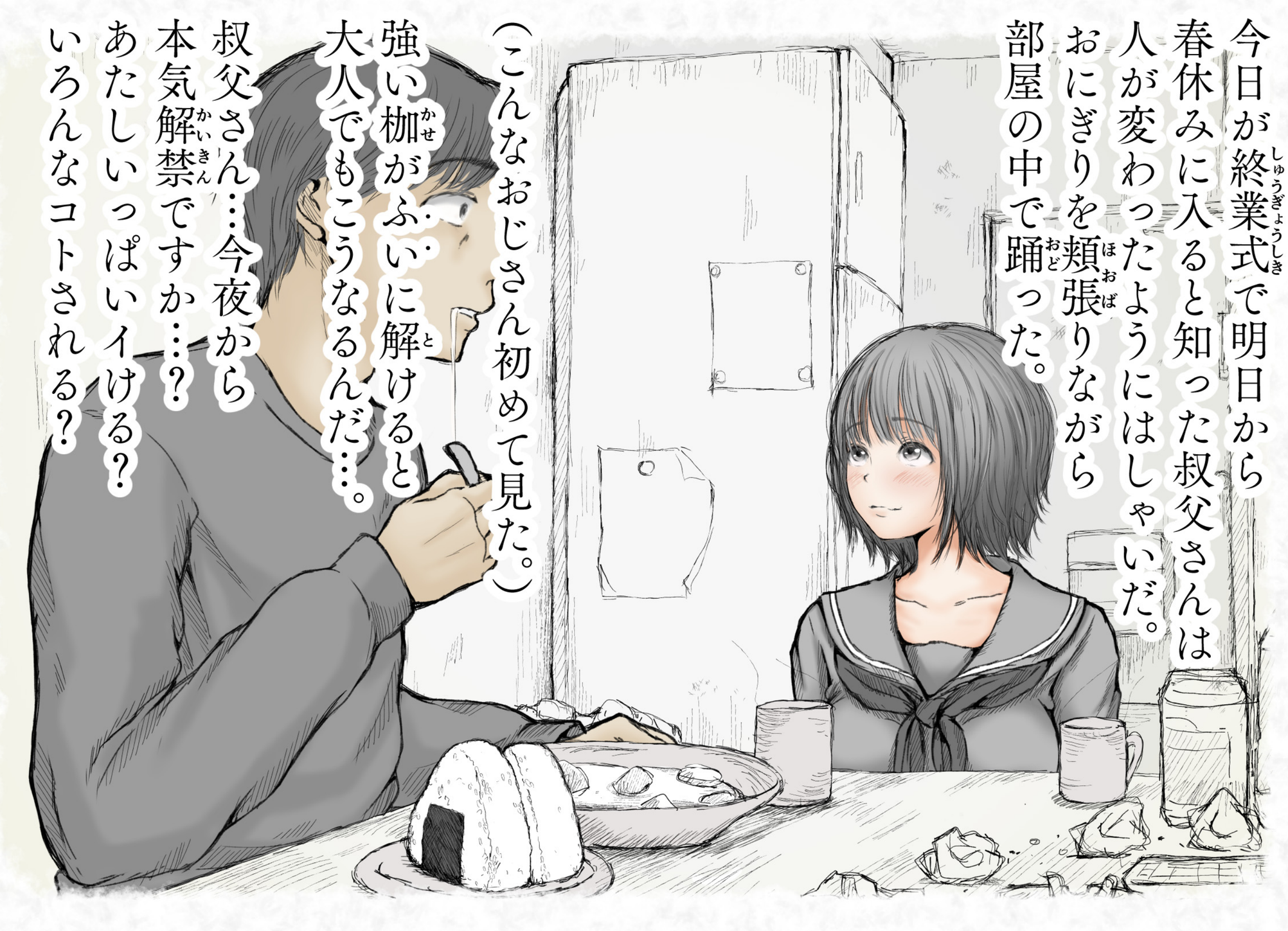
叔父さん曰く。

だから、もくもくとシチューを啜る
叔父さんの租借ほっぺの動きを
ゆっくりと眺めていたいのだけど
もう、すぐにでも帰らないといけない。
でも…。
（…どうかな…
迷惑に思うかな…
……言ってみるだけなら…
あとはおじさんに決めて…
もらって…）

「おじさんね…」
「なんだ？」
「明日仕事？」
「ああ、夜勤だけど。」
「だよね。夜勤って何時から？」
「22時から。」
「22時って…えと10時か。」
「ああ。どうした？」
「うん…。じゃあ今夜は夜更かし？」
「そうだよ。無理してでも
起きておかないと明日きつい。」
「なにするの？友達呼ぶ？」
「いや。ひとりで。
映画観るか……んーなんか。」
「映画か。あたしも観たいな。
おじさんと観たいな。」
「お前とは観ない。」

「え。なんで？」
「横でエロいから落ち着かない。」
「♡じゃ、じゃあ…ソレでも
……いい。そっちでもいい。」
「お前ほんとセックス大好きだな。」
「そ、そんな事ない。
思春期平均。」
「平均ではないだろ絶対。
まあいいとして、明日金曜だぞ。
学校だろ？
だから何度も言ってるじゃん。
俺はお前の彼氏である一方
保護者的な立場もある叔父として
学校に障るような事はしないって。」
「うん。金曜なんだけど…。」
「……なんだよ。」
「うん…。」
「え、なに？……あっ。」


春休みかッ！
ポロッ


『今夜からお前に何をしてもいい俺っ！』
今日が終業式で明日から春休みに入ると知った叔父さんは人が変わったようにはしゃいだ。おにぎりを頬張りながら部屋の中で踊った。
（こんなおじさん初めて見た。）
強い枷がふいに解けると大人でもこうなるんだ…。
叔父さん…今夜から本気解禁ですか…？あたしいっぱいイける？いろんなコトされる？
（早く、早く夜来てっ♡♡♡）

それから数時間後…

試読版はここまでです。
この続きは
ぜひ製品版で
お楽しみください。

真咲シサリ